

上島町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ

－平成25～27年度上島町内遺跡発掘調査等事業報告書－

2018年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会

巻頭図版



積善山山頂付近から望む南の島々（左から赤穂根島、津波島、今治市の伯方島）



積善山遠景（東にある生名島から）

上島町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ

－平成25～27年度上島町内遺跡発掘調査等事業報告書－

2018年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会

序 文

上島町は、愛媛県の北東部、広島県との県境に位置し、瀬戸内海のほぼ中央に浮かぶ上島諸島および魚島群島で構成されています。瀬戸内海国立公園区域内にあり、穏やかな海と多島美が町の大きな魅力です。

平成16年10月1日にさまざまな歴史的背景を持った4町村（弓削町、生名村、岩城村、魚島村）が合併し、現在の上島町となりました。それぞれの島々は古くからの製塩の歴史を有しています。特に弓削島は、中世の「塩の荘園」として知られています。国宝の東寺百合文書には、弓削島荘の記録が残されており、その数は3百余通に及んでいます。平成27年10月に中世の「塩の荘園」であった弓削島荘の記録が多く残る国宝『東寺百合文書』が世界の記憶（ユネスコ記憶遺産）に登録されたことは、郷土の貴重な歴史を再認識する絶好の機会となりました。また、芸予諸島では、平成28年4月に中世の村上海賊に関するストーリーが日本遺産に認定されました。このように芸予諸島の歴史や文化が注目されていることから、歴史的景観や多島美を求めて多くの人々がこの地を訪れることが期待されています。

上島町では、平成25年度から上島町内遺跡発掘調査等事業として文化庁、愛媛県教育委員会のご指導ご助言を賜りながら、製塩遺跡の発掘調査および埋蔵文化財包蔵地詳細分布調査を進めています。本報告書は、平成25年度から平成27年度にかけて実施された岩城地区の埋蔵文化財包蔵地詳細分布調査のうち特に多くの遺物が確認された遺跡および赤穂根島にある丸串古墳の調査成果を報告するものです。詳細分布調査では、踏査に加えて過去に採集された遺物の再整理も実施し、その結果、石風呂海岸遺跡、赤石遺跡、土居ノ内遺跡、小村遺跡等については、新規の「周知の埋蔵文化財包蔵地」として取り扱うこととなりました。丸串古墳の発掘調査では、愛媛大学法文学部考古学研究室の皆様のご協力を賜り、崩落の危険性のある箱式石棺墓の記録保存を行うために発掘調査を実施いたしました。調査後には、箱式石棺の石材を原位置に戻し、復元を行い、崩落の危険性は取り除かれました。

このように、上島町の歴史文化を掘り起こし、学術的な価値を付与し、それらを地域の貴重な歴史文化遺産として保存・活用することが求められています。今後も、詳細分布調査を継続して実施し、遺跡の保護および調査研究を推進する所存です。本報告書が文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究、郷土史研究の基礎資料として広く活用されることを切に願っています。

最後になりましたが、本調査実施および本報告書作成にあたり、多大なるご理解とご協力を賜りました関係機関、地元住民の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成30年3月

上島町教育委員会

教育長 濱 田 和 保

例 言

1. 本書は、上島町教育委員会が平成25年度から国庫補助事業として実施している上島町内遺跡発掘調査等事業のうち、平成25年度から平成27年度にかけて岩城地区で実施した町内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 今回の報告は、岩城地区の遺跡詳細分布調査で確認された主要な遺跡および平成26年度から平成27年度にかけて実施した丸串古墳の発掘調査を対象とした。
3. 調査主体は、上島町教育委員会であり、丸串古墳の発掘調査は愛媛大学法文学部考古学研究室の協力を得た。
4. 調査は、下記の調査員が担当した。
調査員 有馬啓介（上島町教育委員会 生涯学習課）
なお、丸串古墳の発掘調査の調査体制については、丸串古墳発掘調査報告の第2章2に記載した。
5. 遺跡位置図は、『愛媛県越智郡岩城村全図』（岩城村役場発行）を基に作成した。
図1・2は、国土地理院発行の地形図から作成した上島町全図を基に作成した。
これらの図の方位は、国土座標を使用している。
6. 丸串古墳発掘調査報告の地形測量図および実測図の座標は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅳ系の数値を記載した。また、方位記号は磁北を指す。
7. 挿図の縮尺は、各図のタイトルに表示している。
8. 土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に依拠した。
9. 本書で使用する遺物番号は、各遺跡で通し番号を付与した。
図版中の遺物番号は、各遺跡の実測図の遺物番号と対応する。
10. 文章の執筆については、その文末に著者を記した。
11. 調査、整理作業および報告書の作成にあたっては、次の方々からご指導ご協力を賜った。記して感謝申し上げる（順不同、敬称略）。
中野良一、多田仁（公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター）、兵頭勲（愛媛県歴史文化博物館）
12. 出土遺物および調査の記録（実測図、写真等）は、上島町教育委員会で保管している。
13. 本書の編集は、有馬啓介（上島町教育委員会）が行った。

上島町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ

目 次

巻頭図版

序 文	(i)
例 言	(ii)
第1章 岩城地区周辺の環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	2
第2章 調査の経緯・体制・経過	5
1. 調査経緯と目的	5
2. 調査体制	5
3. 調査経過	7
第3章 遺跡詳細分布調査の成果	9
1. 小漕遺跡	9
2. 長江遺跡	11
3. 船越遺跡	15
4. 空久保遺跡	17
5. 積善山遺跡	19
6. 赤石遺跡	21
7. 石風呂海岸遺跡	23
8. 重山宮裏遺跡	28
9. 土居ノ内遺跡	32
10. 小村遺跡	34
11. 高原遺跡	35
第4章 調査の成果と今後の課題	38

丸串古墳発掘調査報告

第1章	遺跡の位置と環境	43
1.	地理的環境	43
2.	歴史的環境	44
3.	周辺の遺跡	44
第2章	調査の経緯・体制・経過	46
1.	調査経緯と目的	46
2.	調査体制	46
3.	調査経過	47
第3章	調査の成果	49
1.	測量調査の成果	49
2.	発掘調査の成果	49
第4章	年代測定結果	55
第5章	調査の成果と今後の課題	58
図 版		59

図 版 目 次

一遺跡詳細分布調査一

- 図版 1 1. 小漕遺跡近景（南西から）
2. 小漕遺跡出土縄文土器
- 図版 2 1. 小漕遺跡出土縄文土器底部
2. 小漕遺跡出土製塩土器・須恵器
3. 小漕遺跡出土石器
- 図版 3 1. 長江遺跡近景（南東から）
2. 長江遺跡出土縄文土器
- 図版 4 1. 長江遺跡出土古式土師器・製塩土器
2. 長江遺跡出土石器
- 図版 5 1. 船越遺跡近景（南西から）
2. 船越遺跡出土縄文土器
- 図版 6 1. 船越遺跡出土縄文土器底部
2. 船越遺跡出土製塩土器・土師器・須恵器
3. 船越遺跡出土石鏃
- 図版 7 1. 空久保遺跡近景（南東から）
2. 空久保遺跡出土弥生土器・紡錘車
3. 空久保遺跡出土石鏃
- 図版 8 1. 積善山遺跡遠景（遺跡は積善山山頂部、南から）
2. 積善山遺跡近景（西から）
3. 積善山遺跡出土弥生土器
- 図版 9 1. 赤石遺跡近景（東から）
2. 赤石遺跡出土製塩土器・古式土師器
- 図版10 1. 石風呂海岸遺跡近景（南西から）
2. 石風呂海岸遺跡出土縄文土器・弥生土器
- 図版11 1. 石風呂海岸遺跡出土製塩土器（1）
2. 石風呂海岸遺跡出土製塩土器

（2）

- 図版12 1. 石風呂海岸遺跡出土製塩土器脚台部
2. 石風呂海岸遺跡出土古式土師器・須恵器
3. 石風呂海岸遺跡出土須恵器・土師器・土師質土器・須恵質土器・瓦器・石錐
- 図版13 1. 重山宮裏遺跡遠景（東から）
2. 重山宮裏遺跡出土弥生土器
3. 重山宮裏遺跡出土土師質土器（1）
- 図版14 1. 重山宮裏遺跡出土土師質土器（2）
2. 重山宮裏遺跡出土土師質土器（3）
- 図版15 1. 重山宮裏遺跡出土土師質土器・瓦器
2. 重山宮裏遺跡出土土器
- 図版16 1. 土居ノ内遺跡近景（北西から）
2. 土居ノ内遺跡出土瓦質土器・瓦器・青磁・土師質土器
- 図版17 1. 小村遺跡近景（南西から）
2. 小村遺跡出土弥生土器・須恵器・須恵質土器・白磁・瓦器
- 図版18 1. 高原遺跡近景（北から）
2. 高原遺跡出土弥生土器・須恵器・瓦器・青磁・土師質土器
3. 高原遺跡出土石器

一丸串古墳発掘調査一

- 図版19 1. 海からみた丸串古墳（南西から）

	2. 丸串古墳 (2008年4月29日撮影)		ら)
図版20	1. 丸串古墳 (2015年春、南から)		2. 長軸方向土層断面 (南から)
	2. 丸串古墳 (2015年春、南西から)		3. 短軸方向土層断面 (西から)
	3. 測量調査 (2015年春)		4. 人骨検出状況1 (南から)
	4. 集合写真 (2015年春)		5. 人骨検出状況2 (南西から)
	5. 蓋石検出状況1 (南から)		6. 蓋石の復元 (北から)
	6. 蓋石検出状況2 (西から)		7. 石棺の保護 (南から)
	7. 蓋石取り外し後の状況1 (南から)		8. 集合写真 (2015年夏)
	8. 蓋石取り外し後の状況2 (南西から)	図版22	1. 頭蓋骨 (南から)
図版21	1. 長側石・短側石の検出状況 (南から)		2. 出土した歯
			3. 出土した製塩土器

挿 図 目 次

一遺跡詳細分布調査一		図17	赤石遺跡位置図 (S=1/5,000)	22
図1	上島町全図 (S=1/100,000)	図18	赤石遺跡出土土器実測図 (S=1/3) ...	22
図2	岩城地区遺跡分布図 (S=1/40,000) ...	図19	石風呂海岸遺跡位置図 (S=1/5,000)	23
図3	小漕遺跡位置図 (S=1/5,000)	図20	石風呂海岸遺跡出土土器実測図 (1) (S=1/3)	24
図4	小漕遺跡出土土器・石器実測図 (S=1/3)	図21	石風呂海岸遺跡出土土器実測図 (2) (S=1/3)	25
図5	長江遺跡位置図 (S=1/5,000)	図22	石風呂海岸遺跡出土土器実測図 (3) (S=1/3)	26
図6	長江遺跡出土土器実測図 (S=1/3) ...	図23	石風呂海岸遺跡出土石錐実測図 (S=1/2)	26
図7	長江遺跡出土石鏃実測図 (S=1/2) ...	図24	重山宮裏遺跡位置図 (S=1/5,000)	28
図8	長江遺跡出土石器実測図 (S=1/3) ...	図25	重山宮裏遺跡出土土器実測図 (1) (S=1/3)	29
図9	船越遺跡位置図 (S=1/5,000)	図26	重山宮裏遺跡出土土器実測図 (2) (S=1/3)	30
図10	船越遺跡出土土器実測図 (S=1/3) ...	図27	重山宮裏遺跡出土土器実測図 (3) (S=1/3)	31
図11	船越遺跡出土石鏃実測図 (S=1/2) ...	図28	土居ノ内遺跡位置図 (S=1/5,000)	33
図12	空久保遺跡位置図 (S=1/5,000)	図29	土居ノ内遺跡出土土器実測図 (S=1/3)	33
図13	空久保遺跡出土土器・土製品実測図 (S=1/3)			
図14	空久保遺跡出土石鏃実測図 (S=1/2) ...			
図15	積善山遺跡位置図 (S=1/5,000)			
図16	積善山遺跡出土土器実測図 (S=1/3) ...			

図30 小村遺跡位置図 (S=1/5,000)	34	図35 地形測量図 (S=1/100)	51
図31 小村遺跡出土土器実測図 (S=1/3)	34	図36 石棺周辺平面図・立面図 (S=1/40) ..	52
図32 高原遺跡位置図 (S=1/5,000)	36	図37 石棺平面図・断面図 (S=1/20)	53
図33 高原遺跡出土土器・石器実測図 (S=1/3)	37	図38 篩い掛けの範囲 (S=1/50)	54
		図39 暦年較正結果.....	57

一丸串古墳発掘調査一

図34 丸串古墳位置図 (S=1/5,000)	43
-------------------------------	----

写 真 目 次

写真1 出土骨.....	56
--------------	----

挿 表 目 次

表1 放射性炭素年代測定結果.....	57
---------------------	----

第1章 岩城地区周辺の環境

1. 地理的環境

愛媛県越智郡上島町は、愛媛県の北東部、広島県との県境に位置し、瀬戸内海のほぼ中央に浮かぶ上島諸島および魚島群島で構成されている。周囲は、瀬戸内海国立公園区域に囲まれた風光明媚な瀬戸の景勝拠点地である。平均気温は15～16℃、年間降雨量1,000mm前後で、瀬戸内海特有の多照寡雨の温暖な気候の地域である。平成16（2004）年10月1日にさまざまな歴史的背景を持った4町村（弓削町、生名村、岩城村、魚島村）が合併し、現在の上島町となった（図1）。すべての島の総面積は、30.38km²である。

旧岩城村にあたる岩城地区は、上島町の西部に位置し、岩城島・赤穂根島・津波島の三島で構成されている。津波島には常住者はいない。岩城島は、中央に積善山（369.8m）を有し、急傾斜で

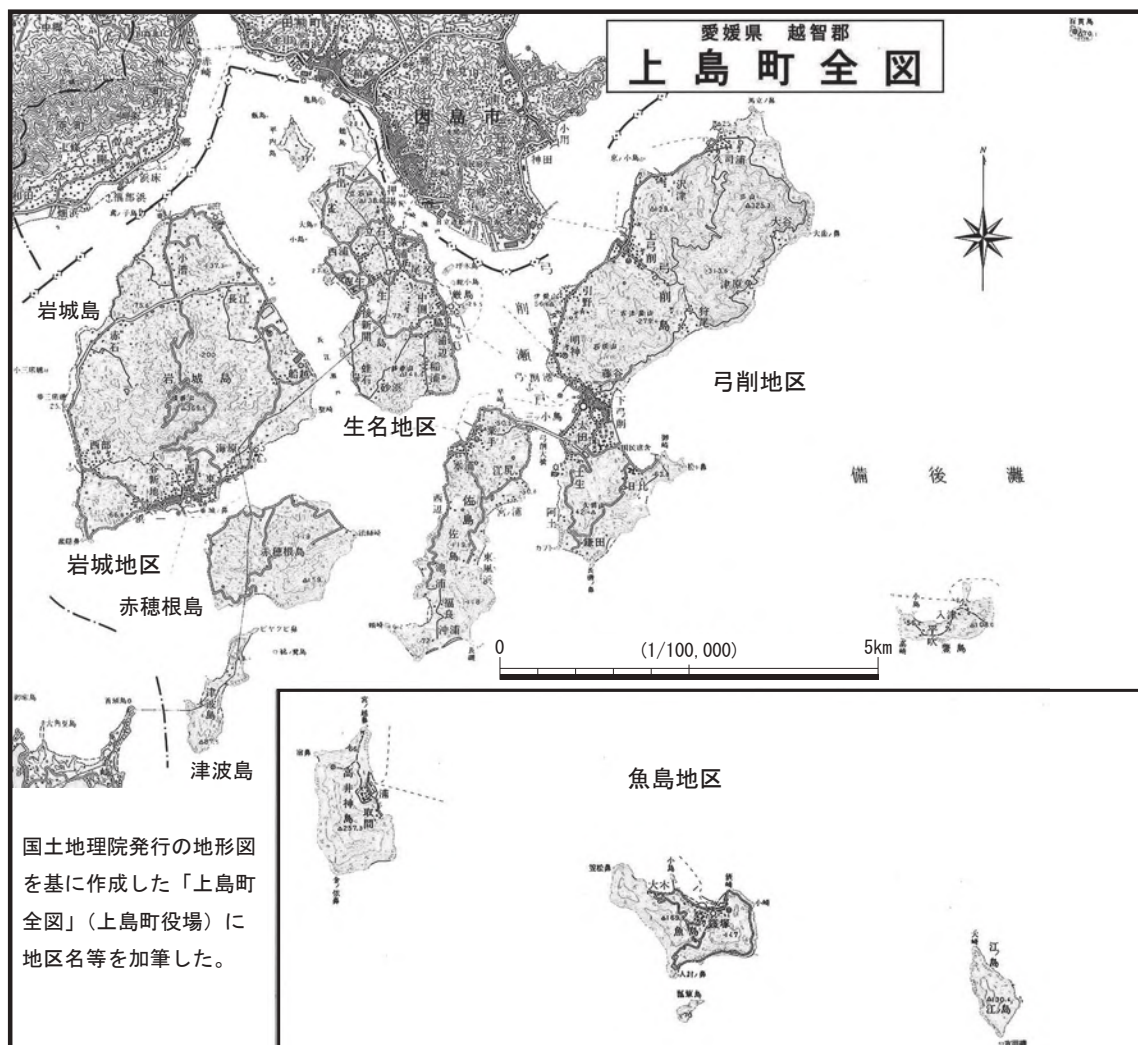


図1 上島町全図（S=1/100,000）

海岸に至り、平地は少ない。丘陵は、果樹園になっている。

岩城島の南西の西部地域には、聖観世音菩薩を安置した国の重要文化財に指定されている祥雲寺観音堂がある。寺に伝わる棟札写しから、永享3（1431）年の建立とされる。祥雲寺本堂裏の傾斜地には、県の天然記念物に指定されている舟形ウバメガシの古木がある。東部の暮坂山山頂には、県の天然記念物に指定されているエジル石閃長岩が露出している。この岩石から新鉱物の杉石、片山石が発見されている。近年の調査研究の結果、リチウムを含む新鉱物である村上石が発見され、学術的に注目されている。

現在、岩城島には4つの造船所があり、島の立地を活かした地場産業が地域経済を支えている。そして、第1次産業の農業が盛んで、青いレモン等の柑橘類を栽培している。

（清水 伸）

2. 歴史的環境（図2）

昭和30年代の後半から40年代の中頃にかけて、岩城島の小漕や長江、船越の各地で相次いで縄文時代の遺跡が発見された。これらは、農業用の井戸や溜池を掘削したことにより偶然発見されたもので、主として縄文時代後期に位置付けられる縄文土器が出土している。旧越智郡島嶼部における縄文時代の遺跡発見の先駆地として研究者の注目を集めた。

さらに、昭和50年代後半の津波島遺跡の発見によって岩城地区の歴史は一気に後期旧石器時代まで遡ることとなった。その後の児島公尊氏の踏査で津波島の丘陵部の複数の箇所ですヌカイト製のナイフ形石器、縦長剥片、石核、尖頭器等が発見され、報告されている〔池尻2003〕。津波島の対岸の伯方島には、金ヶ崎遺跡（今治市伯方町）があるが、津波島遺跡の石器と酷似しており、両遺跡が有機的な関係にあったと考えられる。

岩城島の小漕遺跡の近くではサヌカイト製の石庖丁が採集されている。この地域でも弥生時代から稲作農耕を行っていたことを表す資料である。弥生時代の遺跡として、積善山山頂に位置する積善山遺跡、積善山から南へ続く丘陵上に位置する空久保遺跡が挙げられる。積善山遺跡では、弥生時代中期後葉の凹線文土器が採集されており、高地性集落として知られている。また、空久保遺跡は、標高70～80mの地点に立地する弥生時代中期中葉を中心に営まれた遺跡である。

赤穂根島の南西端の丸串鼻に向かう丘陵頂部には丸串古墳がある。古墳時代のものと思われる箱式石棺墓で、耕作や木の根の影響を受けて崩落が進行していた。遺跡保全のために早急な対応が必要となり、近年愛媛大学法文学部考古学研究室の協力を得て、石棺復元のための発掘調査を実施した。

岩城地区の海岸部周辺では、脚台式および芸予型製塩土器が出土しており、少なくとも古墳時代にはこの地域で土器製塩が行われていたことが分かる。岩城島海原の海岸部に位置する石風呂海岸遺跡では、多量の芸予型製塩土器片が採集されている。製塩業は古来、この地域における重要な産業であった。古くは古墳時代の土器製塩にその端を発し、塩田を利用した揚浜式、入浜式、そして

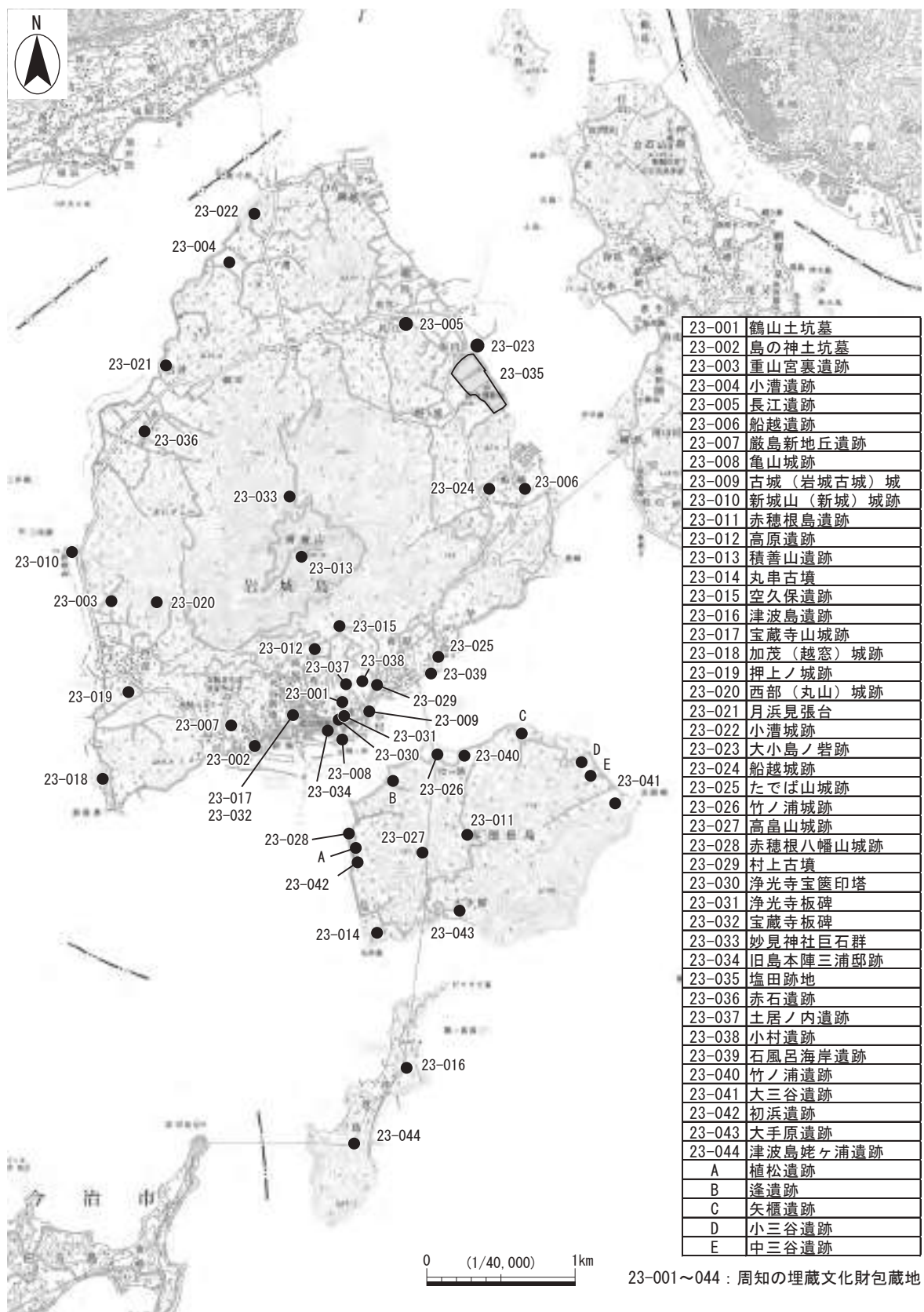


図2 岩城地区遺跡分布図（S=1/40,000）

終末期の昭和40年代の流下式に至るまでの長い製塩の歴史を持っている。

中世には、周辺の生名島や佐島とともに、岩城島は石清水八幡宮の荘園となった。保元3（1158）年の『石清水八幡宮文書』に「石城島」という文字が現れる。「石城島」とは現在の岩城島のことであり、これが文献での初見となる。また、「榊葉集」（『石清水八幡宮史』第2巻）の弘安7（1284）年の記事によると、塩の荘園として備前の牛窓、片岡等とともに生名島および岩城島は、石清水八幡宮の伶人禄塩237石余を負担していることが分かる。京都の東寺領であった弓削島荘と同じく、岩城島も塩の荘園であった。また、現在の広島県廿日市市にある極楽寺に保存されている『極楽寺文書』には、朝廷が岩城島に課した臨時の租税の記録がある。その記録には、宝蔵寺や西部といった現在につながる興味ある名称が見られる。この宝蔵寺は、おそらく現在の岩城島にある宝蔵寺とつながるものであり、岩城島の南西部の西部地域には古くから相当広範囲な塩浜があったことを知ることができる。

『東寺百合文書』の「伊予国弓削島庄雑掌実書状」に、延慶元（1308）年頃、「岩城島や高向祢島の悪党が弓削島荘に打ち入った」ということが記されている。14世紀中頃以降、島々では領家による荘園経営は困難になる。やがて、芸予諸島では村上水軍と呼ばれる海賊衆が台頭し、海賊の本拠地ともいえる海城が各島に築城された。村上水軍は、来島、能島、因島の三家があった。岩城島には、古城、新城などの水軍城の存在をうかがわせる地名が残っているが、その詳細は不明な点が多い。『東寺百合文書』の「図書助某申状」によると、寛正年間（1460年から1466年）に「岩城島では、海賊が城に籠っていた公文と関立を一類残らず殺してしまった」という事件が起こる。この事実から、岩城島の荘園も弓削島荘とほぼ時を同じくして、解体しつつあったということを知ることができる。荘園時代の遺物が確認されている土居ノ内遺跡や小村遺跡の南に位置する半島の丘陵には、中世城郭である亀山城跡がある。築城者や築城時期について正確なことは不明だが、現在でも村上水軍の時代を偲ばせる曲輪や岩礁ピットを確認することができる。

文安2（1445）年から翌年までの1年余りの間に兵庫北関（現在の神戸市）へ入港した船籍や積荷、関料等を記録した『兵庫北関入船納帳』という古文書がある。これには、岩城島を船籍地とする6隻の船が記録されており、この時の船頭名として5名が記録されている。中世の岩城島の海運業の一端を知ることができる貴重な資料である。

近世の岩城島は、松山藩に属し瀬戸内海水運の要地として、松山藩の参勤交代の島本陣が置かれるなど、港町として栄えた。現在、岩城郷土館（旧島本陣三浦邸）をはじめ、波止場、雁木や古い家並などに当時の面影をとどめている。

（清水 伸）

【参考文献】

- 池尻伸吾 2003「愛媛県越智郡岩城村津波島採集の石器」『紀要愛媛』第3号、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
岩城村誌編集委員会編1986a『岩城村誌』上巻 古代・中近世編、岩城村
岩城村誌編集委員会編1986b『岩城村誌』下巻 現代編、岩城村
岩城村郷土誌編集委員会編1970『伊予岩城島の歴史』（上巻）岩城村教育委員会
岩城村公民館編1997『岩城村の歴史文化ウォッチング』岩城村教育委員会

第2章 調査の経緯・体制・経過

1. 調査経緯と目的

現在の上島町は、旧弓削町、生名村、岩城村、魚島村の1町3村が合併し、平成16（2004）年10月1日に誕生した町である。上島町域における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は、合併当初には117箇所を数えた。町村合併前の旧4町村時代に調査された埋蔵文化財包蔵地は、抜本的な見直しがされないまま踏襲され、調査の質は各地区で大きく異なっている。また、そのほとんどの埋蔵文化財包蔵地については、所在する地番や範囲が不明瞭なものが多く、遺跡の時代や性格についても再調査する必要があった。そのような状況から平成25年度から町内遺跡詳細分布調査を実施することとなった。

遺跡詳細分布調査では、かつての行政区分ごとの埋蔵文化財包蔵地調査カードを集約し、町内全域において均質な調査を行う。この調査を実施することによって、町内の埋蔵文化財包蔵地を把握し、開発事業等に適切な対応ができるものとする。また、埋蔵文化財包蔵地の今後の適切な保護・活用を図ることもできる。

なお、平成26年度から平成27年度にかけて実施した丸串古墳の発掘調査の調査経緯と目的、調査体制、調査経過の詳細については、丸串古墳発掘調査報告の第2章に記載した。

2. 調査体制

学識経験者で構成される上島町内遺跡発掘調査事業指導委員会の指導および助言を得て、上島町教育委員会が調査を実施した。調査体制は、以下のとおりである。なお、現地調査終了後も岩城地区で出土した遺物整理作業および報告書作成作業を行ったため、平成28年度以降の体制も記載する。

指導委員会副委員長としてご指導を賜っていた児島公尊氏は、平成29（2017）年6月12日にご逝去された。本書の報告は、児島氏の長年の調査に拠るところが大きい。謹んで哀悼の意を表す。

上島町内遺跡発掘調査事業指導委員会

委員長	愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター センター長	村上 恭通	
副委員長	元愛媛県文化財保護指導員	児島 公尊	平成29年6月逝去
委員	元松山大学教授	山内 譲	平成26年9月から
委員	愛媛大学 先端研究・学術推進機構 埋蔵文化財調査室 准教授	柴田 昌児	
委員	今治市村上水軍博物館 主査（学芸員）	田中 謙	

オブザーバー：文化庁記念物課、愛媛県教育委員会文化財保護課

事務局の体制（上島町教育委員会）

平成25年度

亀山 和磨（教育長）
小林 薫（教育課 課長）
中濱 淳一（教育課 課長補佐）
津國 昌成（教育課 社会教育係 係長）
有馬 啓介（教育課 社会教育係 主事補、調査担当）
児島 公尊（調査・整理作業、平成25年10月から）

平成26年度

亀山 和磨（教育長）
小林 薫（教育課 課長）
田房 良和（教育課 課長補佐）
津國 昌成（教育課 社会教育係 係長）
有馬 啓介（教育課 社会教育係 主事補、調査担当）
児島 公尊（調査・整理作業）
藤川 雅邦（調査・整理作業、平成27年1月から）

平成27年度

亀山 和磨（教育長）
大本 一明（生涯学習課 課長）
田房 良和（生涯学習課 課長補佐）
中西 智恵（生涯学習課 生涯学習係 主査）
有馬 啓介（生涯学習課 生涯学習係 主事補、調査担当）
児島 公尊（調査・整理作業）
藤川 雅邦（調査・整理作業）

平成28年度

亀山 和磨（教育長、平成28年11月18日まで）
濱田 和保（教育長、平成28年11月19日から）
田房 良和（生涯学習課 課長）
池本 雅則（生涯学習課 課長補佐）
中西 智恵（生涯学習課 生涯学習係 主査）
有馬 啓介（生涯学習課 生涯学習係 主事、調査担当）
児島 公尊（調査・整理作業）

藤川 雅邦（調査・整理作業）

平成29年度

濱田 和保（教育長）

池本 雅則（生涯学習課 課長）

中西 智恵（生涯学習課 生涯学習係 係長）

有馬 啓介（生涯学習課 生涯学習係 主事、調査担当）

藤川 雅邦（調査・整理作業、平成29年6月まで）

清水 伸（調査・整理作業、平成29年12月から）

3. 調査経過

平成25年度から平成27年度にかけて岩城地区での遺跡詳細分布調査を実施した。これは、保存目的の分布調査および丸串古墳の発掘調査で構成されている。

調査は、岩城地区全域を対象とした。詳細分布調査では、周知の埋蔵文化財包蔵地の現況把握および時代・範囲・種類の確定、並びに新たな埋蔵文化財包蔵地の把握を行った。既存の埋蔵文化財包蔵地調査カードの精査および加筆・修正、当該地域での踏査（遺物の表面採集、地権者や周辺住民への聞き取り調査）を行った。踏査の方法は、周知の埋蔵文化財包蔵地について、写真撮影および略図作成を行い、現況を把握した。また、遺物の表面採集を行い、範囲の確定を進めた。さらに、地形や聞き取り調査、過去の出土例等から遺跡の可能性のある地点についても踏査を行い、資料の収集に努めた。

岩城地区では、これまで地域の人々の努力によって多くの遺物が採集・保管されており、その出土地確認と遺物整理作業が早急の課題であった。遺物の多くは、昭和30年代後半以降に採集されたものである。当時岩城中学校の教諭であった橋田武氏と岩城地区出身の郷土史家の児島公尊氏によって多くの遺跡が発見された。本書もこれらの遺跡の調査成果を中心に報告している。そのため、本書に詳細を報告していない遺跡については、他の地区での詳細分布調査報告と併せて扱うこととする。

岩城地区での踏査は、平成25（2013）年10月21日から実施した。平成26年度にかけてすべての埋蔵文化財包蔵地の踏査と遺跡の可能性のある地点の調査を行った。本書で報告する遺跡の調査日は、第3章の各遺跡の成果に記載した。現地での調査終了後は、他の地区での詳細分布調査と並行して、遺物の整理作業および報告書作成作業を行った。その結果、愛媛県教育委員会と協議を行った9件（赤石遺跡・土居ノ内遺跡・小村遺跡・石風呂海岸遺跡・竹ノ内遺跡・大三谷遺跡・初浜遺跡・大手原遺跡・津波島姥ヶ浦遺跡）について、平成28（2016）年7月5日から周知の埋蔵文化財包蔵地として取扱うこととなった。一方、平成26（2014）年11月27日に愛媛県教育委員会および上

島町教育委員会が実施した上島架橋（岩城橋）整備事業に伴う踏査の結果、船越にある歩行原潮見台跡が周知の埋蔵文化財包蔵地から解除された。

なお、箱式石棺の崩落が進行し、遺跡保全のために早急な対応が必要であった赤穂根島の丸串古墳は、愛媛大学法文学部考古学研究室と上島町教育委員会と協同で調査を実施した。平成27（2015）年3月に測量調査、同年8月に発掘調査を実施した。調査終了後、平成28（2016）年3月15日に箱式石棺を原位置に戻し、復元を行った。

（有馬啓介）

第3章 遺跡詳細分布調査の成果

1. 小漕（おこぎ）遺跡

所在地：上島町岩城4387番地

調査日：平成25年10月30日、31日

平成26年6月19日

（1）遺跡の概要

小漕遺跡は、岩城島の北西部、現在でも水田が広がる低地に位置する遺跡である（図3、図版1-1）。対岸には広島県尾道市の生口島がある。昭和38（1963）年4月、水田に農業用の井戸（径4.1m）を掘削した際に多量の縄文土器が発見された〔橋田1963〕。土器片以外にも炭化したドンダグリの入った遺構があったとされるが、詳細な記録は残っていない。出土した遺物は、縄文時代後期初頭の中津式土器をはじめ、その多くは縄文時代後期の所産である。また、古墳時代の脚台式製



図3 小漕遺跡位置図（S=1/5,000）

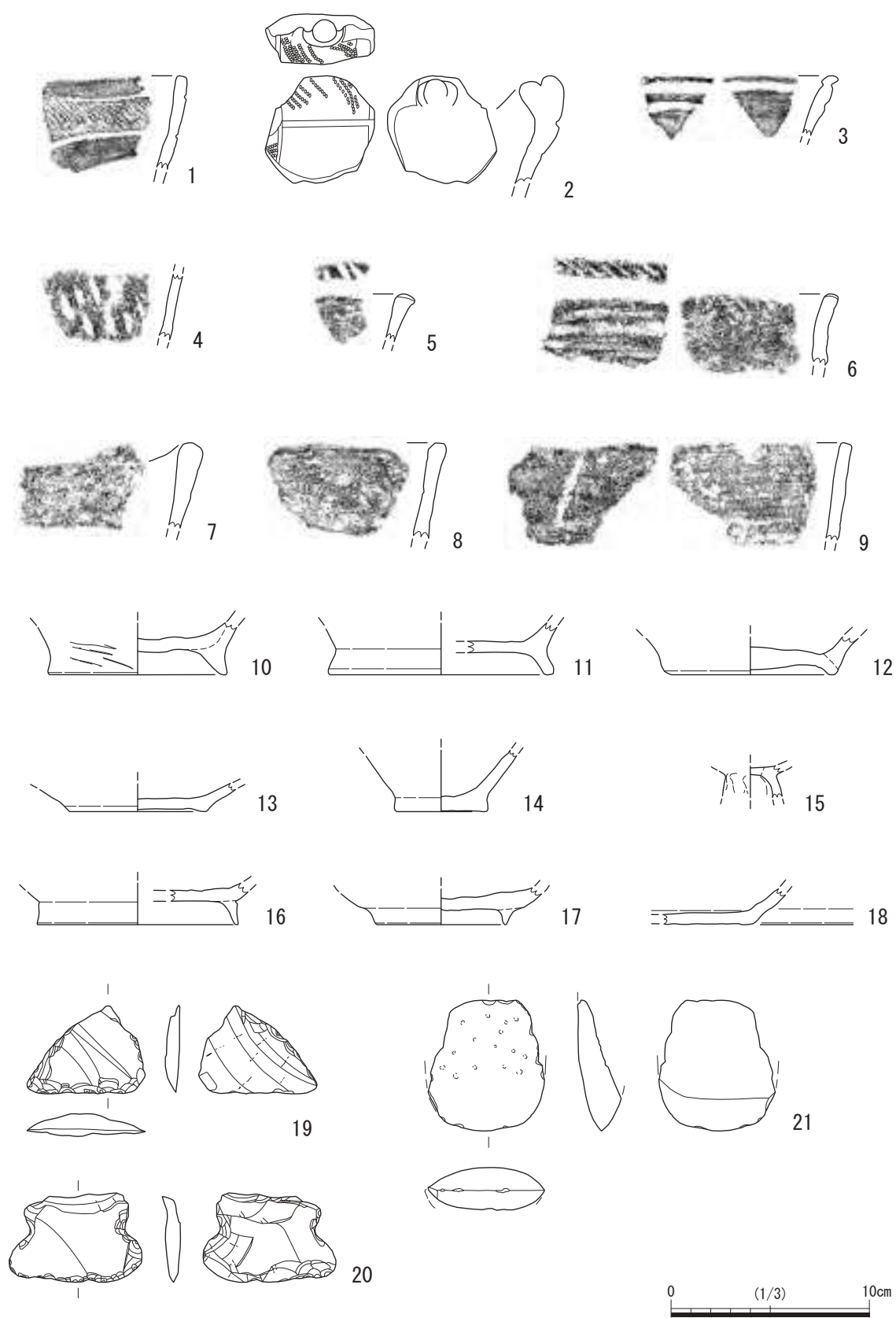


図4 小漕遺跡出土土器・石器実測図 (S=1/3)

塩土器の脚台部や古代の須恵器の底部も確認されている。

かつて、小漕遺跡周辺で有舌尖頭器が出土したとされる報告がある（長井1982）。地元での聞き取り調査の結果、小漕遺跡から南西へ約200m離れた箇所で貯水地掘削中に出土したことが分かった（図3）。また、小漕遺跡周辺の丘陵では、スクレイパーや弥生時代所産のサヌカイト製の石庖丁、磨製石斧等も採集されている（図3）。

（2）遺物（図4、図版1－2、図版2）

1～9は縄文土器の口縁部と体部である。1は縄文時代後期初頭の磨消縄文土器の深鉢の口縁部である。中津式土器で、外面の2条の沈線文の間に縄文が施されている。2は磨消縄文土器の深鉢の口縁部で、波状口縁を呈する。口縁部内面に突起を有する。縄文時代後期前葉に位置付けられる。3は深鉢の口縁部で外面に2条、内面に1条の沈線文が施されている。縄文時代晩期初頭のものである。4は縄文時代後期の深鉢の体部片で、外面に雨だれ状刺突文が施されている。5～9は縄文時代後期の深鉢の口縁部で、5・6は口唇部に刻目が施されている。7は波状口縁を呈し、縄文時代後期前葉の所産である。

10～14は縄文土器の底部である。10～13は高台底、14は平底を呈する。10・11・14は深鉢の底部、13は浅鉢の底部であると考えられる。いずれも縄文時代後期の所産である。

15は脚台式製塩土器の脚台部である。柴田昌児氏による分類〔柴田2012〕の芸予Ⅲ－2～3類に相当する。16～18は古代の須恵器の底部で、16・17は高台を伴う。

19～21は小漕遺跡周辺で採集された石器である。19はサヌカイト製のスクレイパーである。長さ4.5cm、幅6.0cm、厚さ1.2cm、重さ20.91gである。20はサヌカイト製の打製石庖丁である。両端には紐通し孔の代わりに紐掛け用の抉りが見られる。長さ4.5cm、幅6.7cm、厚さ0.9cm、重さ25.99gである。21は緑色玄武岩製の両刃の磨製石斧である。基部は大きく欠損している。長さ6.6cm、幅5.9cm、厚さ2.2cm、重さ77.86gである。

（有馬啓介）

2. 長江（ながえ）遺跡

所在地：上島町岩城5462番地1、5472番地1

調査日：平成25年10月28日

（1）遺跡の概要

長江遺跡は、岩城島の北東部に位置する遺跡である（図5、図版3－1）。遺跡は、現在の海岸線から約300m離れている。聞き取り調査によると、長江遺跡も小漕遺跡と同様に、昭和30年代後半に農業用井戸を掘削中に偶然発見された遺跡である。現在でも、縄文土器を中心とした土器片が



図5 長江遺跡位置図 (S=1/5,000)

井戸周辺で散見されることから、井戸掘削中に縄文時代の遺物包含層もしくは遺構を掘削したことは間違いない。

遺物は、縄文時代後期所産の縄文土器が多く見られるが、中には縄文時代前・中期まで遡る可能のある土器片も含まれている。また、古式土師器の小型甕、脚台式製塩土器の脚台部も確認されている。また、縄文時代の石鏃やサヌカイト製のスクレイパー等、多くの石器も採集されている。

(2) 遺物 (図6～8、図版3-2、図版4)

1～19は縄文土器である。1～4、6～17は深鉢の口縁部、5は深鉢の体部片である。1は口縁部外面の2条の沈線文の間に竹管状の刺突文、内面には貝殻腹縁による刺突文が施されている。縄文時代前期～中期初頭のものである可能性がある。2は外面に集合沈線文が施されている。縄文時代中期の所産であると思われる。3は磨消縄文土器である。波状口縁を呈し、外面の沈線文の上下には縄文が見られる。4は沈線文系土器である。波状口縁を呈し、外面には沈線文が施されている。5は磨消縄文土器である。1条の沈線と縄文を確認できる。3～5は縄文時代後期初頭に位置付けられる。6・7は波状口縁を呈し、口縁部外面には沈線文が施されている。8は肥厚した口唇部に2条の沈線文が施されている。6～8は縄文時代後期前葉に位置付けられる。9は口縁部外面



図6 長江遺跡出土土器実測図 (S=1/3)

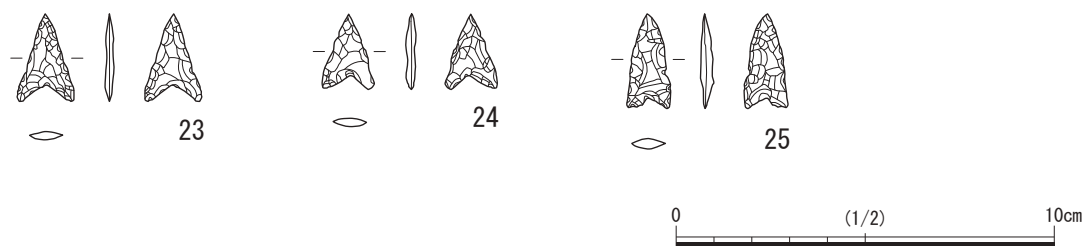


図7 長江遺跡出土石鏃実測図 (S=1/2)

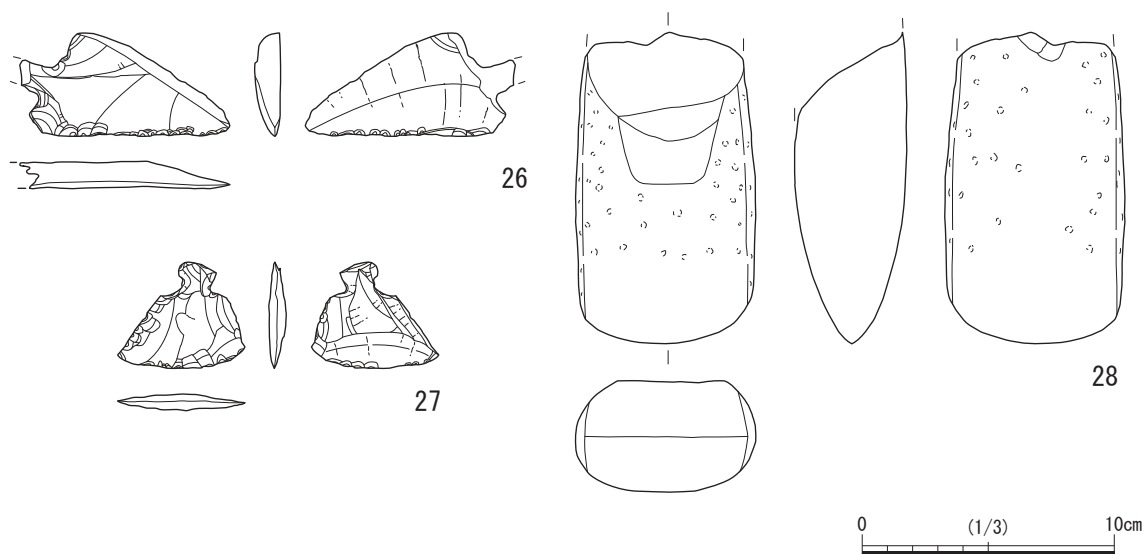


図8 長江遺跡出土石器実測図 (S=1/3)

に多条の沈線文が施され、10は口縁部外面に3条の細い沈線文が施されている。11は肥厚した口縁部内面に2条の沈線文が見られる。9～11は縄文時代後期中葉に位置付けられる。12は口縁部外面に1条の沈線文が施されている。13は口縁端部外面に三角形の貼付文が施され、口唇部には半月状の刺突文が見られる。14～17は無文深鉢であり、14の口縁部は肥厚する。12・15・16・17は縄文時代後期、14は縄文時代後期中葉の所産であると思われる。18・19は底部であり、凹底である。18は浅鉢の可能性があり、19は深鉢である。いずれも縄文時代後期の所産であると思われる。

20は古式土師器の小型甕である。ほぼ完形であり、内外面は板ナデ調整が施され、外面にはタタキ目が残る。底部は矮小化しており、その外面には黒斑が見られる。口縁部径10.4cm、器高10.5cmである。弥生時代後期終末（庄内期）の所産である。21・22は脚台式製塩土器の脚台部である。内外面は押捺・ナデによって整形・調整されている。芸予Ⅲ－1類に相当する〔柴田2012〕。

23～25はサヌカイト製の打製石鏃である。重さは順に0.75g、0.64g、0.91gである。すべて縄文時代の所産であると考えられる。

26・27は縄文時代のサヌカイト製の石匙である。26は長さ4.1cm、幅8.3cm、厚さ1.0cm、重さ30.1gである。27は長さ4.2cm、幅5.0cm、厚さ0.65cm、重さ11.62gである。28は安山岩製の磨製石斧であ

る。両刃で基部は欠損している。長さ12.3cm、幅7.1cm、厚さ4.4cm、重さ620.53gである。長江遺跡近隣で採取されたもので、弥生時代前期末から中期の所産の可能性がある。

(有馬啓介)

3. 船越（ふなこし）遺跡

所在地：上島町岩城6027番地、6028番地、6029番地、6087番地

調査日：平成25年10月30日

(1) 遺跡の概要

船越遺跡は、岩城島の東部に位置する遺跡である（図9、図版5－1）。対岸には長江瀬戸を隔てて生名島がある。小漕遺跡同様に海拔ゼロメートル地帯にある。昭和44（1969）年の夏に船越農園の水源地を掘るために作業が進められていたが、その残土の中に多くの縄文時代から古代に至るまでの土器が含まれていた〔岩城村誌編集委員会編1986、岩城村郷土誌編集委員会編1970〕。ま



図9 船越遺跡位置図 (S=1/5,000)

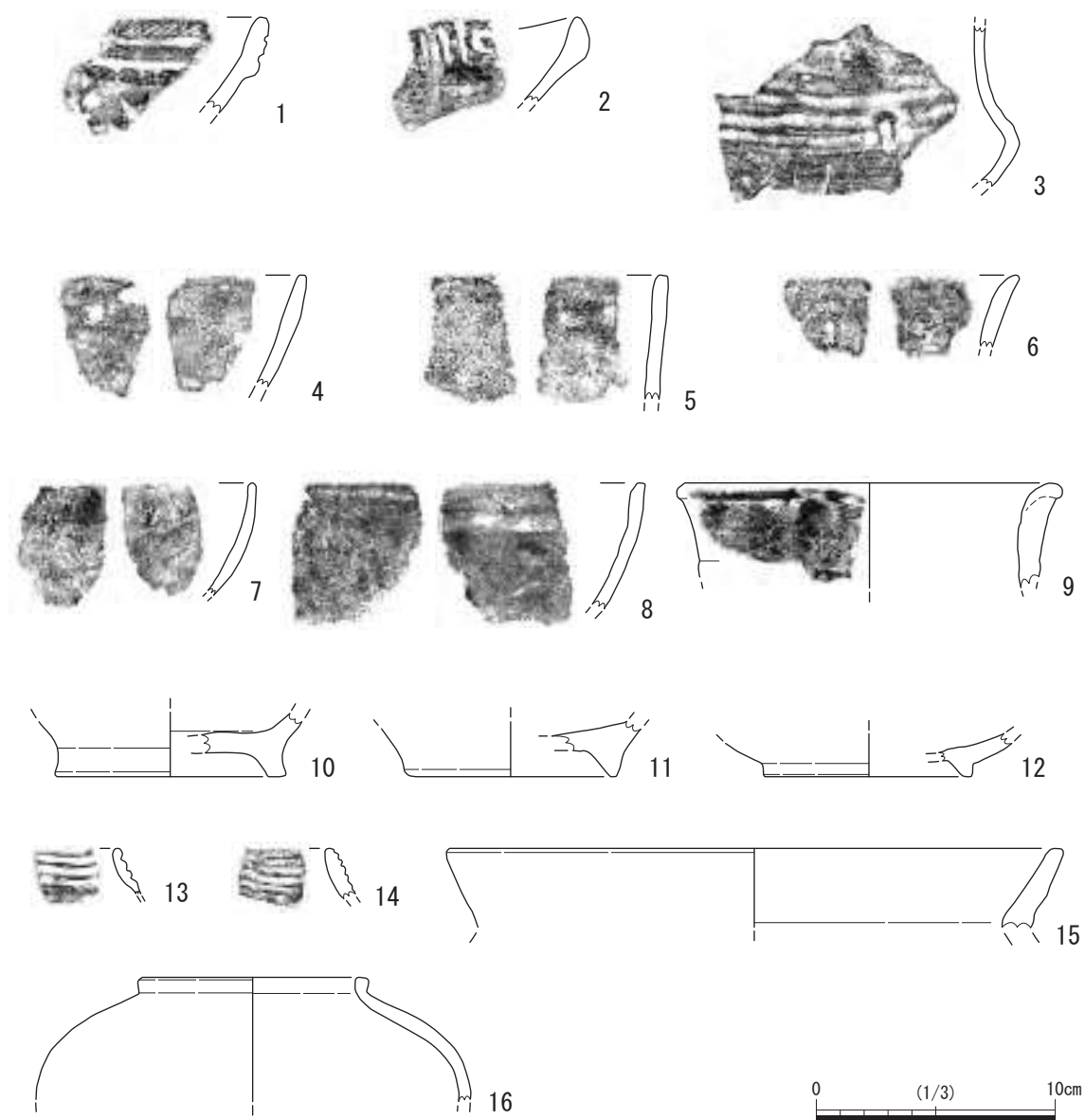


图10 船越遺跡出土土器実測図 (S=1/3)

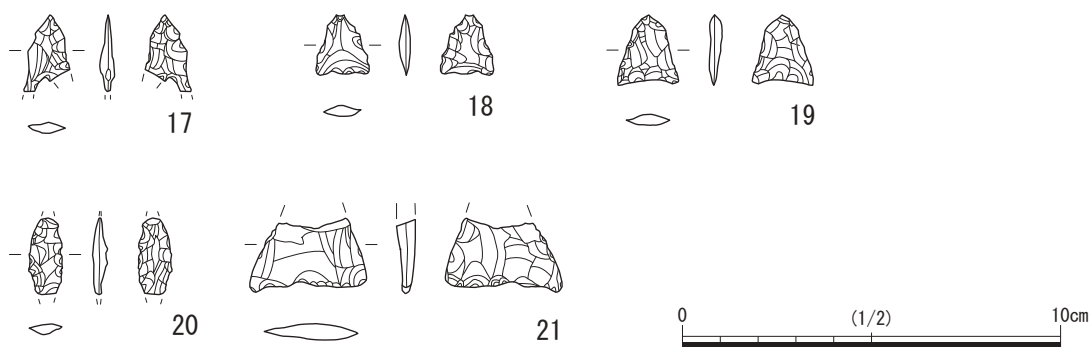


图11 船越遺跡出土石鏃実測図 (S=1/2)

た、その残土は、その周辺に盛り上げられたり、近くの海岸に運ばれたりしたようである。そのため、現在畑地になっている低地以外の箇所でも、縄文土器片が確認されている。

遺物は、縄文時代後期中葉の縁帯文土器や縄文時代後期後葉に位置付けられる凹線文土器が見られ、その他の多くの縄文土器は後期のものである。小漕遺跡や長江遺跡と同様に製塩土器が確認されており、岩城島の海岸部の多くの箇所でも古墳時代に土器製塩が行われていたことが分かる。

(2) 遺物 (図10・11、図版5-2、図版6)

1～12は縄文土器である。1・2は縄文時代後期中葉の縁帯文土器の口縁部である。1は肥厚した口縁部に2条の沈線文と縄文が施されている。2は緩い波状口縁を呈し、肥厚した口縁部にタテ方向と円形の沈線文が施されている。3は縄文時代後期後葉の凹線文土器の体部片である。外面には凹線文と刺突文が施され、器形から注口土器の可能性もある。4～6は深鉢、7・8は浅鉢の口縁部である。いずれも無文であり、縄文時代後期の所産であると思われる。9は壺形土器の口縁部である。口縁端部は肥厚し、そこから下がった外面に突帯文が施されている。10・11は深鉢、12は浅鉢の底部である。いずれも高台底を呈し、縄文時代後期の所産であると思われる。

13・14は製塩土器の口縁部である。いずれも芸予型製塩土器であり、13は芸予Ⅶ-1類、14は芸予Ⅴ-1類～Ⅵ-1類に位置付けられる〔柴田2012〕。15は土師器の甕の口縁部である。古墳時代後期の所産である。16は古墳時代の須恵器の短頸壺である。外面の肩部より下方には自然釉が付着している。

17～21はサヌカイト製の打製石鏃である。重さは順に0.65g、0.77g、0.87g、0.66g、2.98gである。17は縄文時代の五角形鏃である。その形態から、17～19は縄文時代、20・21は弥生時代中期の石鏃であると考えられる。

(有馬啓介)

4. 空久保 (そらくぼ) 遺跡

所在地：上島町岩城970番地1、971番地1、974番地、975番地

調査日：平成25年10月21日

(1) 遺跡の概要

空久保遺跡は、積善山から南へ続く丘陵上、標高70～80mの地点にある(図12、図版7-1)。傾斜の緩やかな果樹園で、弥生時代中期中葉(Ⅲ様式)の弥生土器とともに多くのサヌカイト製の石鏃や剥片が採集されている。また、空久保遺跡から南西へ200mほど離れた標高55～75mの丘陵上に位置する高原遺跡からも弥生時代中期中葉の土器片が確認されている。広島県尾道市の生口島でもこの時代の多くの遺跡が標高70～80m 付近の見晴らしの良い斜面に立地することから、当時

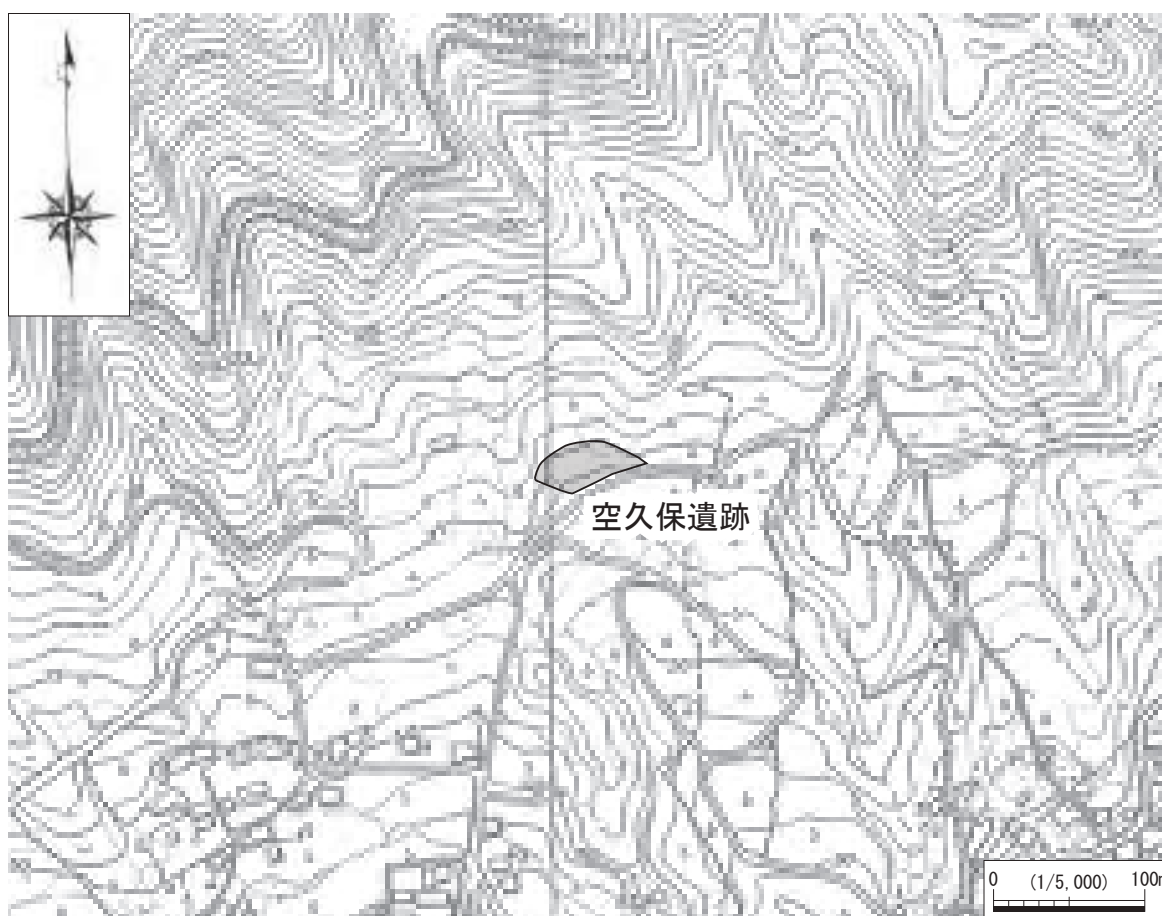


図12 空久保遺跡位置図 (S=1/5,000)

の居住域を考えるうえで、重要な遺跡である。

(2) 遺物 (図13・14、図版7-2・3)

1～6は弥生土器である。1はF字口縁の甕と思われ、口縁部直下に圧痕文突帯が施されている。2は「く」字形口縁甕の口縁部で、屈曲部に圧痕文突帯が施されている。3は壺の口縁部であると思われ、口縁部下に刻目を有する断面三角形突帯が施されている。4は壺の体部片であり、櫛描波状文と直線文を確認できる。5は壺の頸部片であり、断面三角形突帯と棒状浮文が施されている。6は壺の底部である。これらの土器は、弥生時代中期中葉（Ⅲ様式）の所産であると考えられる。7は弥生時代の土製紡錘車である。土器からの転用である。

8～17はサヌカイト製の打製石鏃である。重さは順に1.06g、1.55g、1.17g、0.88g、1.60g、0.78g、1.23g、0.37g、1.41g、0.71gである。凹基式の石鏃が多くを占めるが、16・17は弥生時代中期の所産の可能性のある柳葉形石鏃である。8～15は縄文時代の所産と思われる。

(有馬啓介)

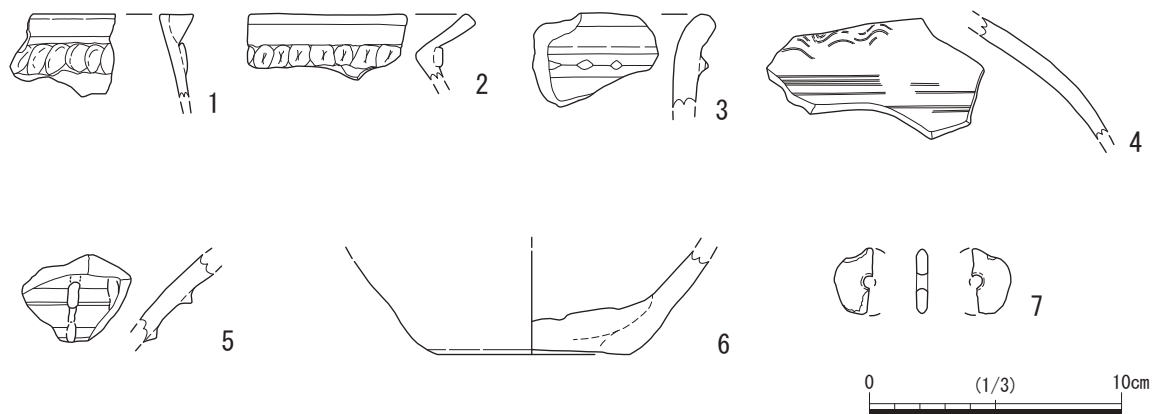


図13 空久保遺跡出土土器・土製品実測図 (S=1/3)

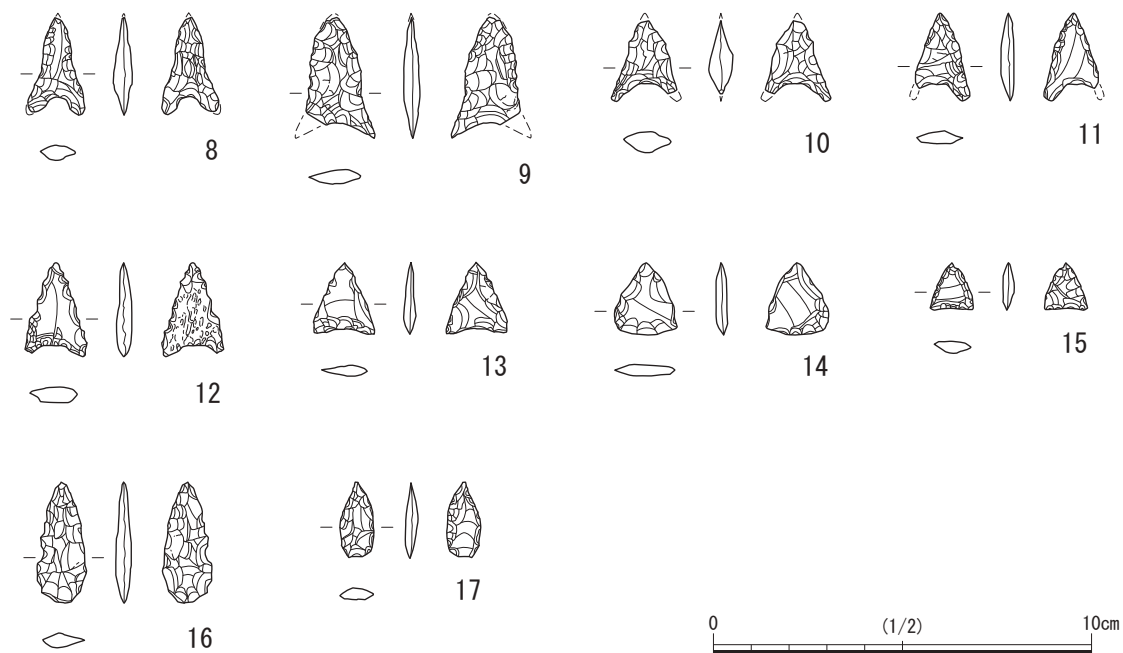


図14 空久保遺跡出土石鏃実測図 (S=1/2)

5. 積善山（せきぜんやま）遺跡

所在地：上島町岩城6256番地、6372番地20、6372番地22、6380番地、6381番地、6382番地、6383番地、6393番地

調査日：平成25年11月13日

（1）遺跡の概要

積善山遺跡は、岩城島のほぼ中心にある標高369.8mの積善山の山頂部に位置する遺跡である

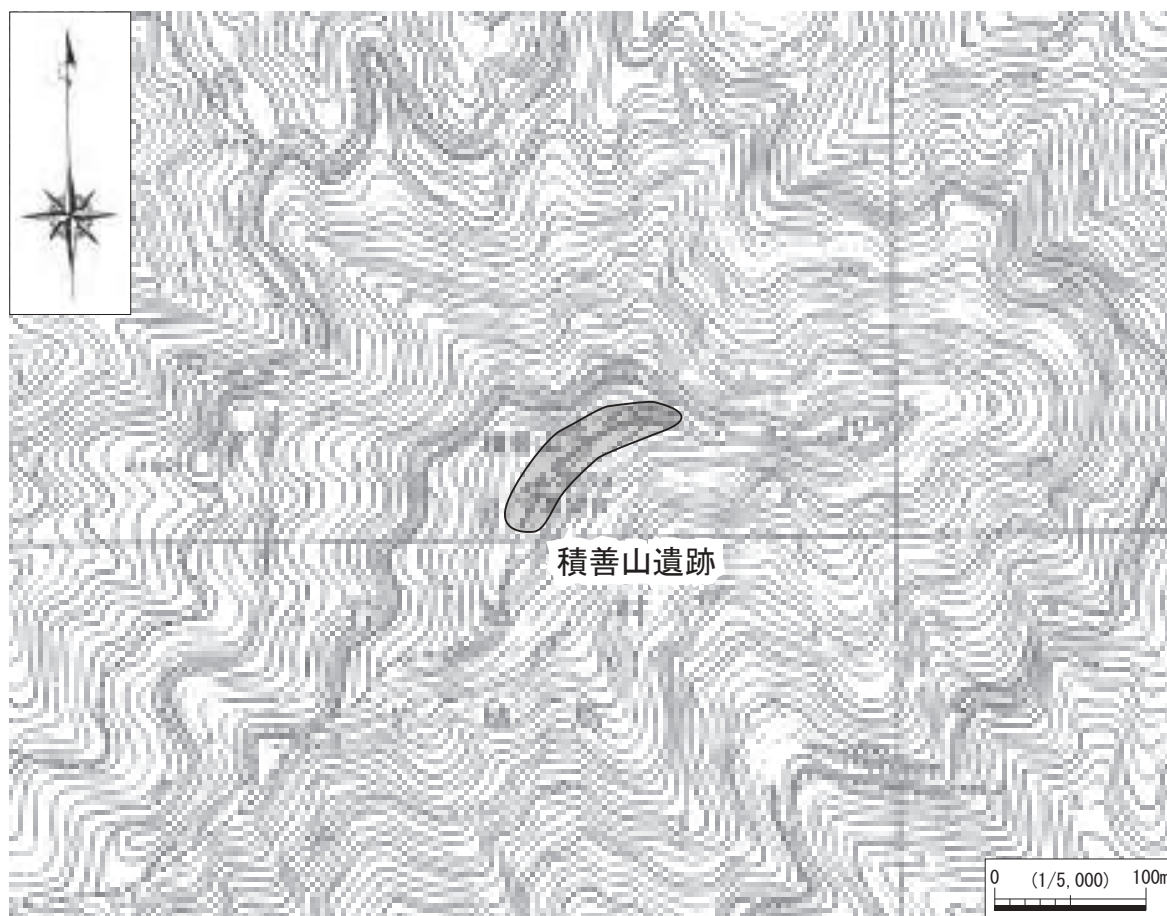


図15 積善山遺跡位置図 (S=1/5,000)

(図15、図版8－1・2)。山頂からは、西条市の八堂山遺跡や香川県荘内半島の紫雲出山遺跡といった瀬戸内海を代表する高地性集落を遠望することができる。遺物は、山頂部にある旧展望台跡地に新展望台を建設後に北側斜面から採取されたものである。弥生時代中期後葉の凹線文土器が主体を占める。生名島の立石山遺跡とともにこの地域を代表する高地性集落である。高地性集落の性格や機能についての議論が必要とされる遺跡である。

(2) 遺物 (図16、図版8－3)

1～7は弥生土器である。1は短頸広口壺の口頸部であり、口縁端部に2条の凹線文が見られる。頸部には貝殻腹縁で押捺された圧痕文突帯が施されている。2は広口壺の口縁部であり、口縁端部に4条の凹線文が施されている。3は高杯の口縁部で、外面に5条の凹線文が施されている。4は高杯の脚部で、矢羽根形透かしが見られるが、貫通していない可能性が高い。また、外面にはヘラ状工具による沈線文が施され、内面にはシボリ痕が残る。5・6は壺の底部で、5の外面にはタテ方向のヘラミガキが施され、6の外面にはヘラミガキが施されているがタタキ目が残る。7は壺の体部から底部で外面にはタテ方向、内面にはヨコ方向のヘラミガキが施されている。これら

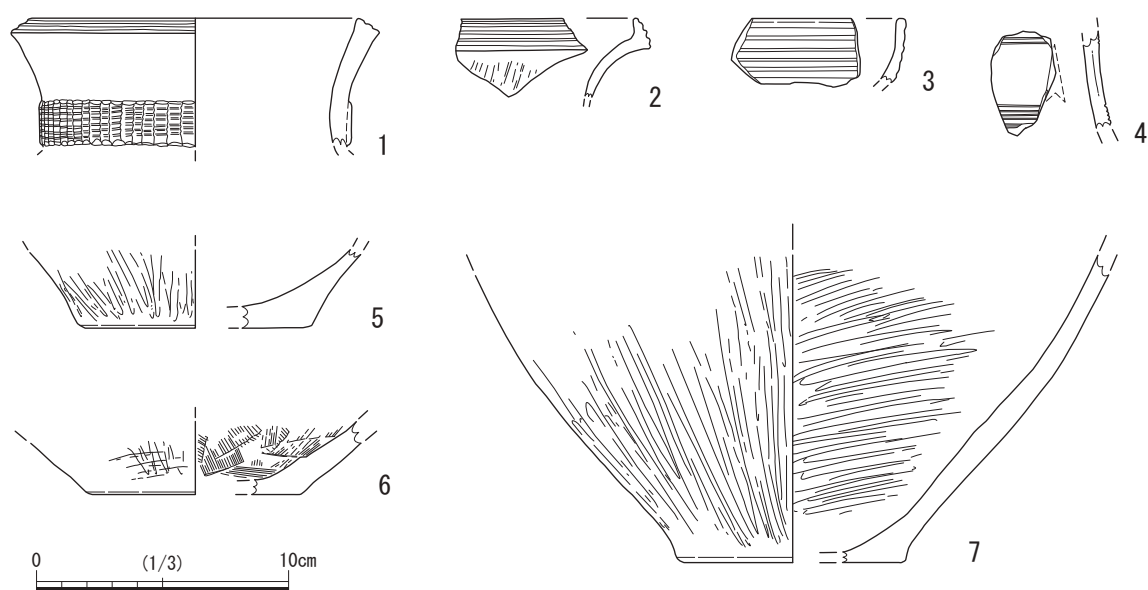


図16 積善山遺跡出土土器実測図 (S=1/3)

は、概ね弥生時代中期後半に位置付けられる土器群である。なお、1～4は弥生時代中期後葉（Ⅳ－2～3様式）の所産である。

（有馬啓介）

6. 赤石（あかいし）遺跡

所在地：上島町岩城3781番地1

調査日：平成26年3月18日

（1）遺跡の概要

赤石遺跡は、岩城島の西部、積善山から赤石海岸に向かう開折谷の先端部（標高約5m）に位置する（図17、図版9－1）。現在は海岸から300mほど内陸に位置するが、それは近世以降の埋め立てによるもので、かつては遺跡近くまで海が入り込んでいたと考えられている。現在は、ビニールハウスが建っている。赤石遺跡からは、古墳時代前期の脚台式製塩土器の脚台部が採集されており、布留0～1式に比定される高杯や鉢の口縁部片も確認されている。

（2）遺物（図18、図版9－2）

1～4は脚台式製塩土器の脚台部である。芸予Ⅲ－1～2類に相当する〔柴田2012〕。押捺・ナデによって整形・調整されている。2・3の外面にはタタキ目が残る。

5は古式土師器の高杯である。段から口縁部がやや外反してのびる。古墳時代前期の布留0～1式に比定され、1～4の脚台式製塩土器もこの時期に近いものである。

(有馬啓介)



図17 赤石遺跡位置図 (S=1/5, 000)

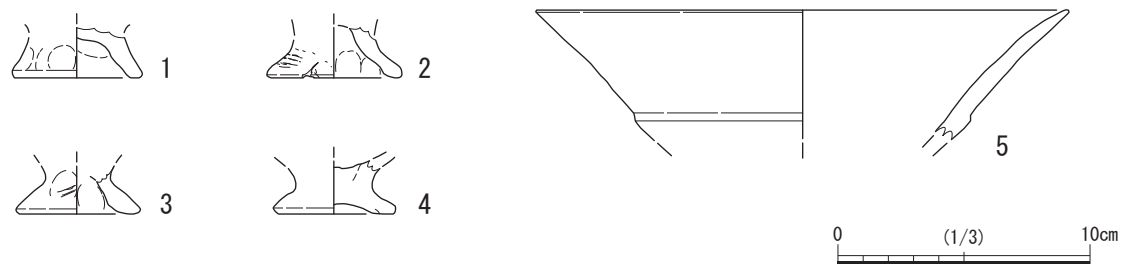


図18 赤石遺跡出土土器実測図 (S=1/3)

7. 石風呂海岸（いしぶろかいがん）遺跡

所在地：上島町岩城259番地、260番地、366番地2、369番地1 地先海岸

調査日：平成25年10月28日

（1）遺跡の概要

石風呂海岸遺跡は、岩城島の南部、たで場山の西の通称「石風呂」を流れる小川の河口に広がる海浜に位置する（図19、図版10－1）。遺跡から海を隔てて500mほど南には赤穂根島がある。採取された遺物の年代は幅広く、多種多様である。小川の上流域から運ばれたものや、護岸工事によって掘り出されたものが混在していると思われる。河口部ほど多くの土器散布が見られる。

佐島の宮ノ浦遺跡からはブランデーグラス状の器に高台を伴った古墳時代前期の脚台式製塩土器が多量に出土しており、石風呂海岸遺跡からもこの時期の製塩土器の脚台部が確認されている。しかし、その他の多くの製塩土器は、芸予型と呼ばれる丸底または尖底に近い丸底を有する鉢型の製塩土器である。これは、古墳時代後期とされる6世紀から7世紀にかけてのものである。また、石風呂海岸からは同時代の須恵器も採集されている。近年の護岸整備により、石風呂海岸の地形は改



図19 石風呂海岸遺跡位置図（S=1/5,000）

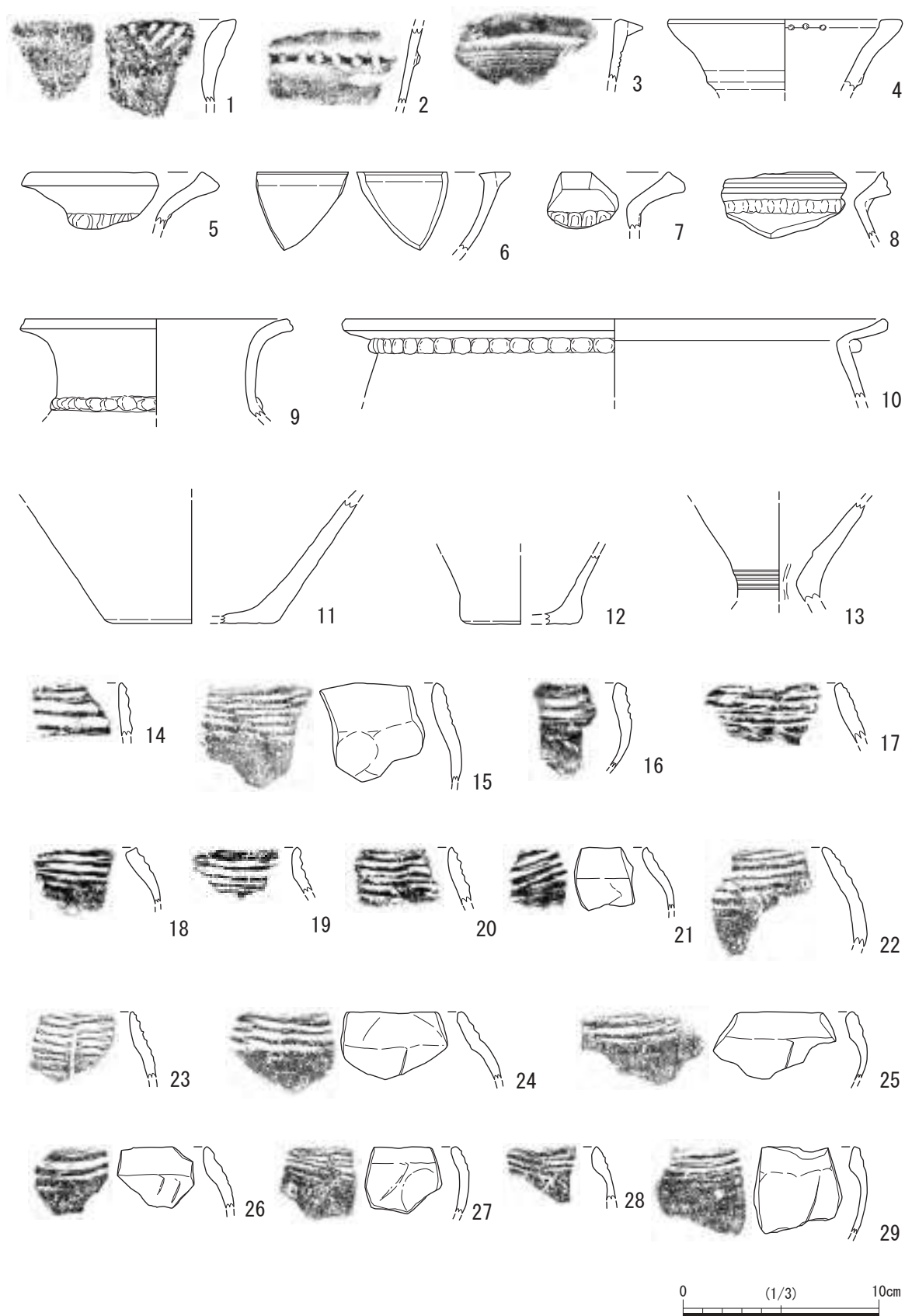


図20 石風呂海岸遺跡出土土器実測図 (1) (S=1/3)

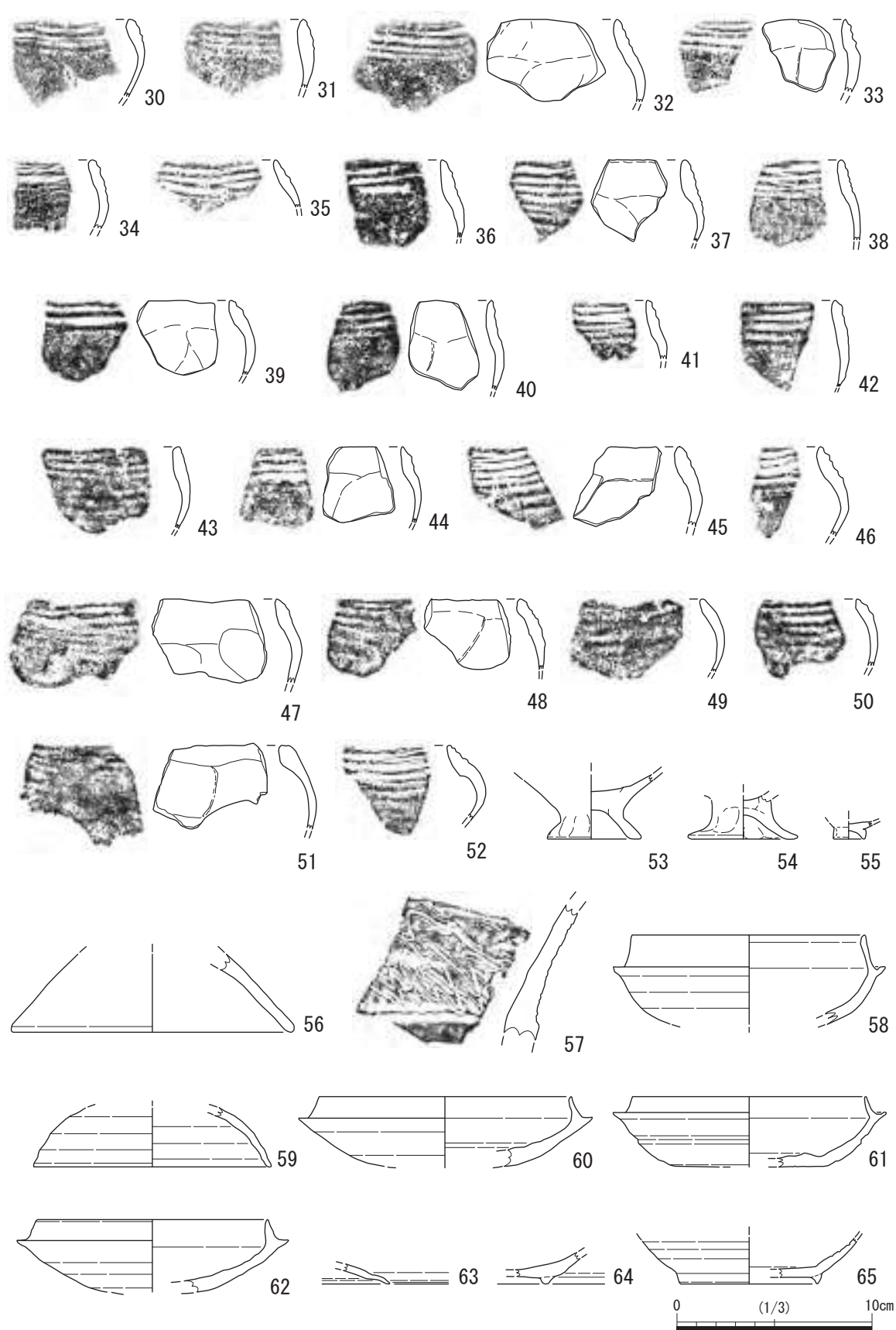


图21 石風呂海岸遺跡出土土器実測図（2）（S=1/3）

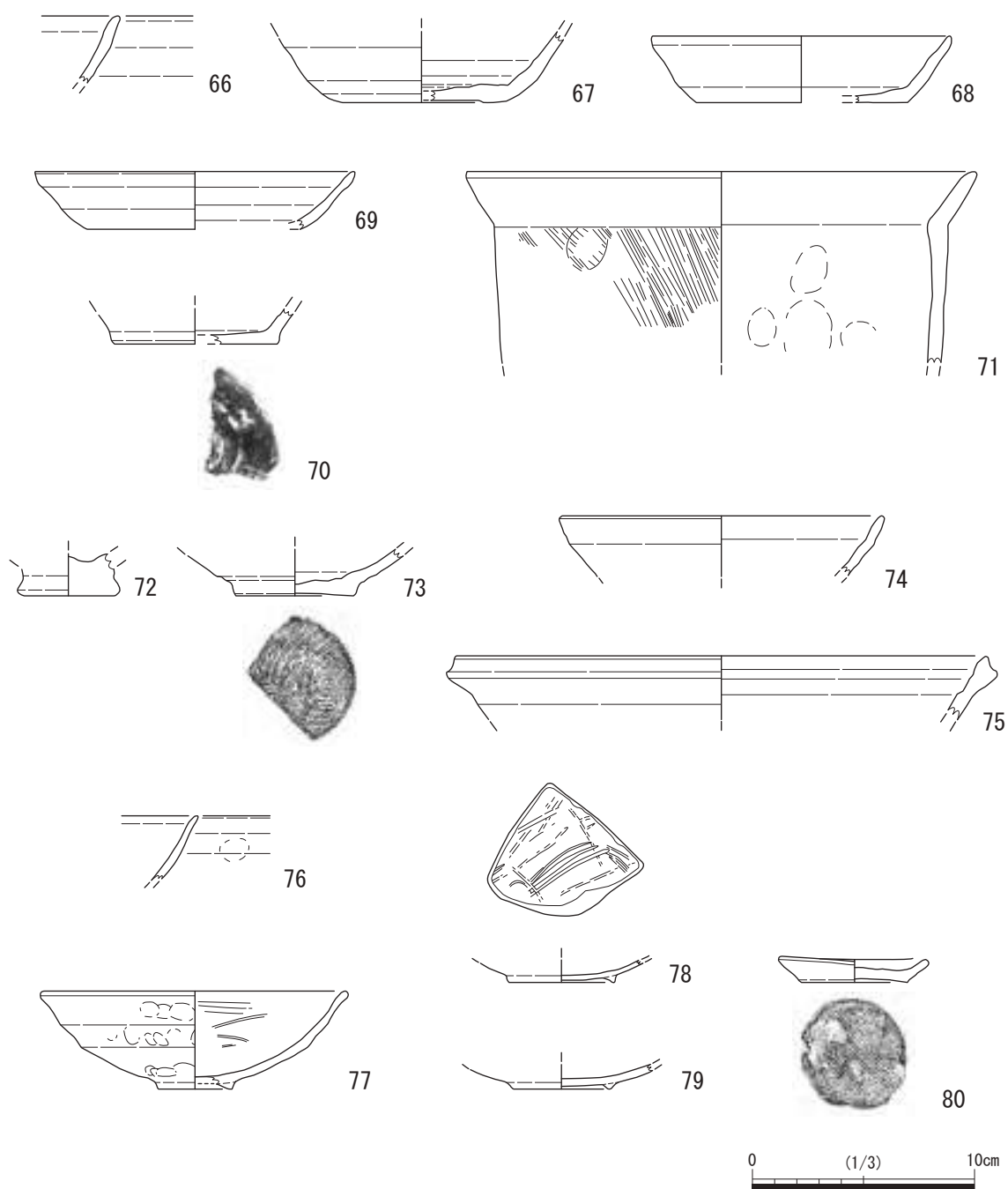


図22 石風呂海岸遺跡出土土器実測図（3）（S=1/3）

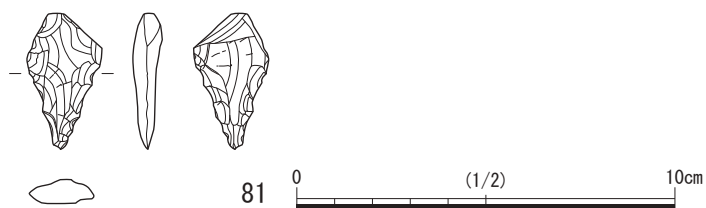


図23 石風呂海岸遺跡出土石錐実測図（S=1/2）

変されているが、この地の周辺で古墳時代後期に生産のピークを迎える土器製塩が行われていたことは間違いない。

(2) 遺物 (図20～23、図版10－2、図版11・12)

1は縄文土器の深鉢の口縁部である。口唇部内側に斜めの沈線が施されている。縄文時代後期中葉に比定される。2は縄文土器深鉢の体部片である。縄文時代晩期後半の刻目突帯文土器である。

3～13は弥生土器である。弥生時代中期(Ⅱ～Ⅳ様式)に位置付けられる。3は甕の口縁部であり、口縁部外面に断面三角形突帯が施され、その下には4条の櫛描文が見られる。4は短頸壺の口縁部である。口縁端部からやや下がった外面に断面三角形突帯、口唇部内側に刺突文が施されている。5は広口壺の口縁部である。頸部に圧痕文突帯が施されている。6は鉢であり、口縁部外面に断面三角形突帯が施されている。7・8・10は「く」字形口縁甕の口縁部で、屈曲部に圧痕文突帯が施されている。また、8の口縁端部は拡張され、2条の凹線文が見られる。弥生時代中期後葉(Ⅳ－1～2様式)の凹線文土器である。9は広口壺の口頸部である。頸部に圧痕文突帯が施されている。11は壺、12は甕の底部である。13は高杯であり、杯部と脚部の境には5条の沈線文が巡る。

14～52は製塩土器の口縁・体部片である。タタキ技法による成形がされ、内面には二枚貝やヘラ状工具により整形・調整された痕跡が見られるものが多い。特に48・51の内面には明瞭な貝殻圧痕を確認することができる。14は3世紀後半の脚台式製塩土器である芸予Ⅲ－1類に相当する可能性がある〔柴田2012〕。15～49は6世紀代の芸予型製塩土器(鉢形製塩土器)である芸予Ⅴ－1類に位置付けられる。また、50～52は芸予Ⅴ－1類の次の段階の芸予Ⅵ－1類まで時期が下る可能性がある。53～55は製塩土器の脚台部である。53・54は芸予Ⅲ－1～2類、55は芸予Ⅲ－3類に位置付けられる。

56は古式土師器の台付鉢または高杯の脚部である。古墳時代前期の所産である。57～70は須恵器である。57は古墳時代の大甕の口頸部と考えられる。外面には波状文が施されている。58・60・61・62は杯身、59は杯蓋である。いずれも6世紀から7世紀にかけての所産である。60～62の底部外面には回転ヘラ削り調整が見られる。60の受部から底部にかけての外面には自然釉が付着している。58は陶邑編年Ⅱ型式2段階、59～62は陶邑編年Ⅱ型式4～5段階に位置付けられる〔中村編1995〕。63～70は古代の須恵器である。63は杯蓋の口縁部である。64～70は杯であり、64・65の底部には高台が貼り付けられている。68・70の底部外面には回転ヘラ切り痕が見られる。70は円盤高台の杯底部であり、焼成不良のため器面は灰白色を呈する。71は土師器の甕である。いわゆる古代の企救型甕で、最大径は口縁部にある。

72は土師質土器の杯の底部である。円盤高台底部外面の切り離し痕は不明である。

73～75は須恵質土器で、73・74は東播系の可能性のある椀であり、73の円盤高台の底部外面には回転糸切り痕が見られる。74の口縁部外面には重ね焼きの痕跡が見られる。75は東播系コネ鉢であり、口縁端部はわずかに肥厚する。12世紀末から13世紀前半の遺物である。

76～79は和泉型瓦器碗である。77～79の底部には断面三角形の高台が貼り付けられている。77・78の内面には暗文（ヘラミガキ痕）が見られる。77～79は12世紀末から13世紀前半の所産である。

80は土師質土器の皿である。底部外面に静止糸切り痕が見られる。

81はサヌカイト製の石錐である。長さ3.6cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm、重さ4.27gである。

なお、74・75・77・78・80は『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書－埋蔵文化財編－』（愛媛県教育委員会文化財保護課編2002）で報告されている。

（有馬啓介）

8. 重山宮裏（かさねやまみやうら）遺跡

所在地：上島町岩城3294番地1、3295番地

調査日：平成25年10月31日

（1）遺跡の概要

重山宮裏遺跡は、岩城島の南西部、西部（にしべ）と呼ばれる集落の北にある西部八幡神社の西



図24 重山宮裏遺跡位置図（S=1/5,000）

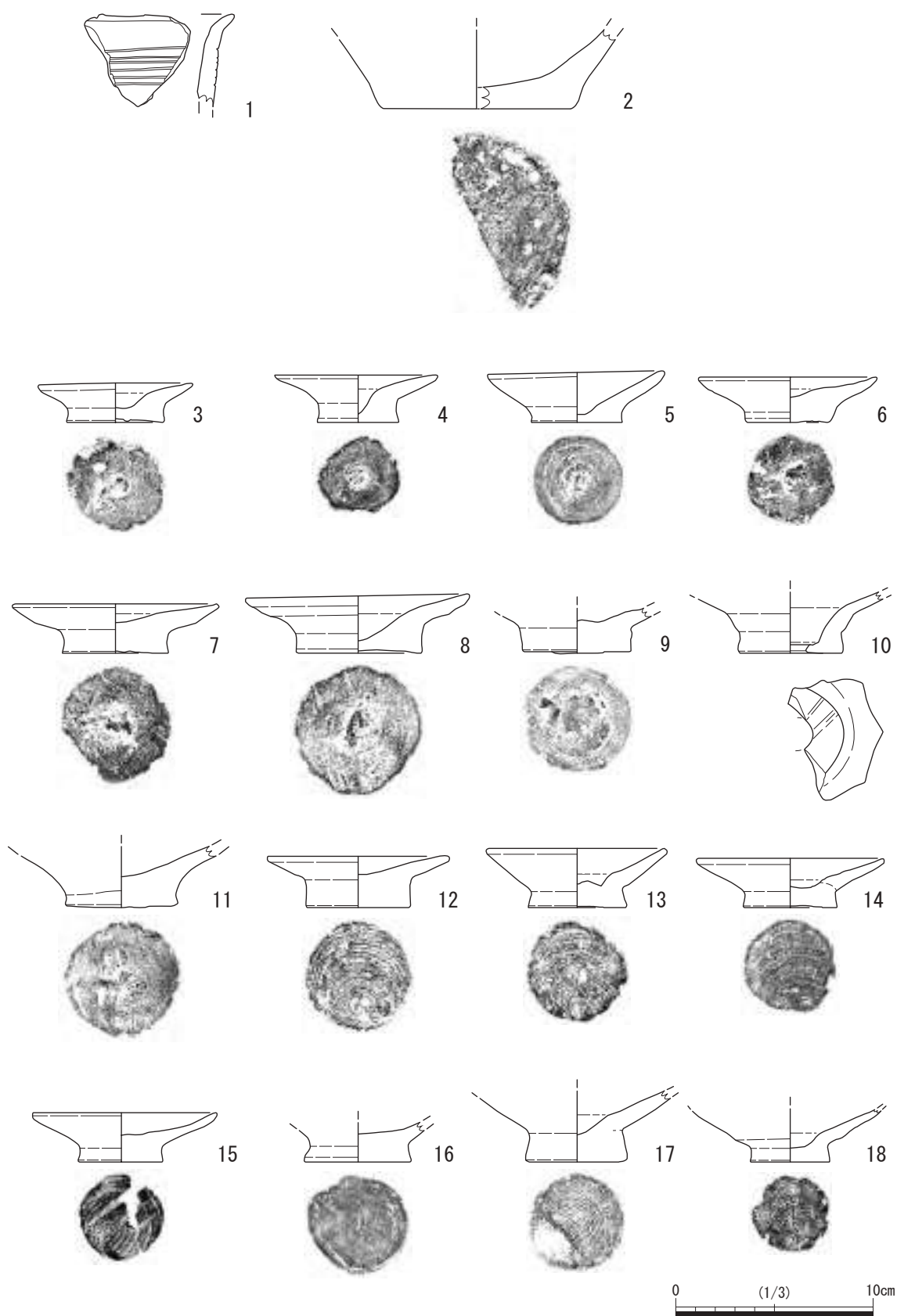


图25 重山宮裏遺跡出土土器実測図（1）（S=1/3）

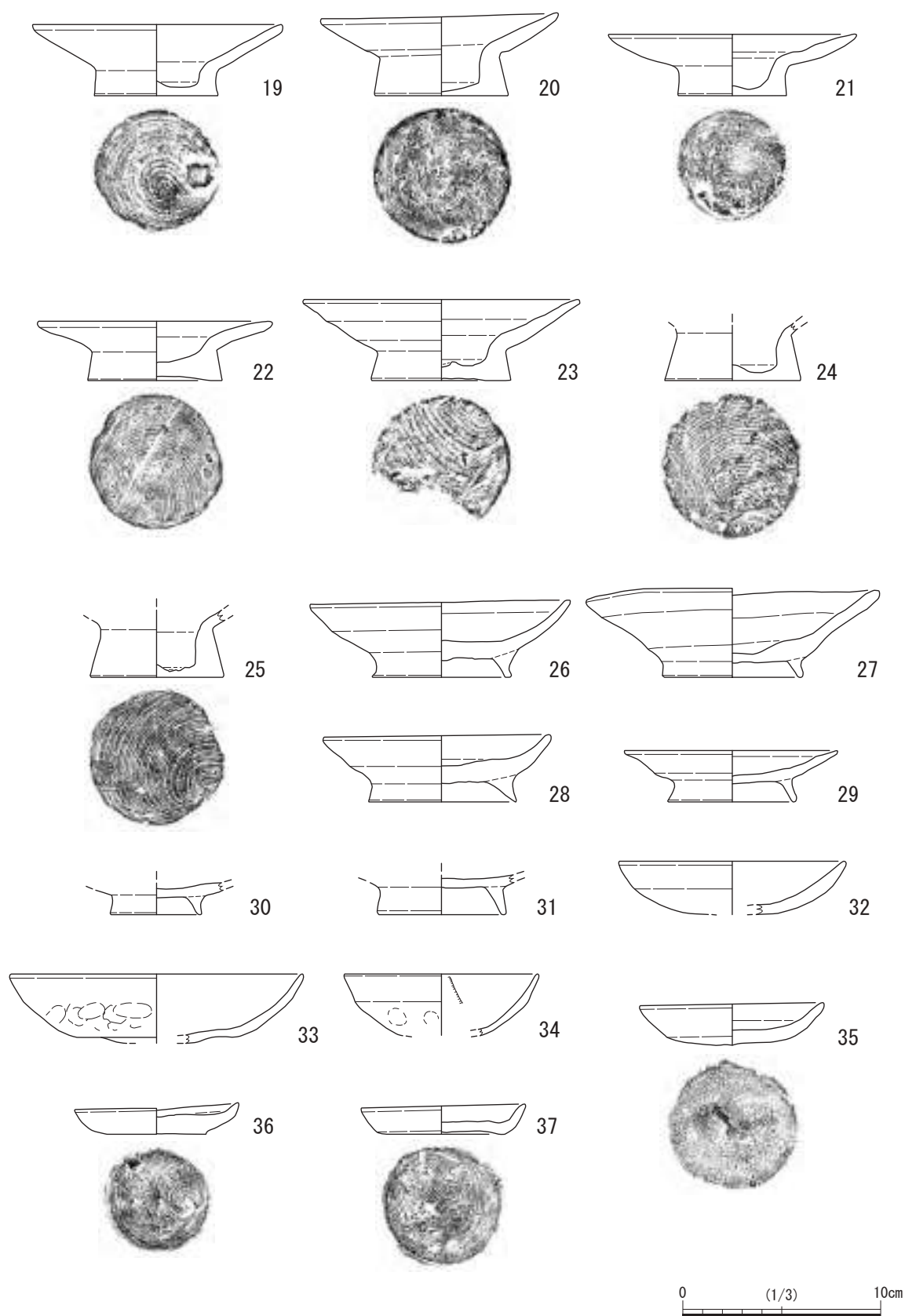


図26 重山宮裏遺跡出土土器実測図（2）（S=1/3）

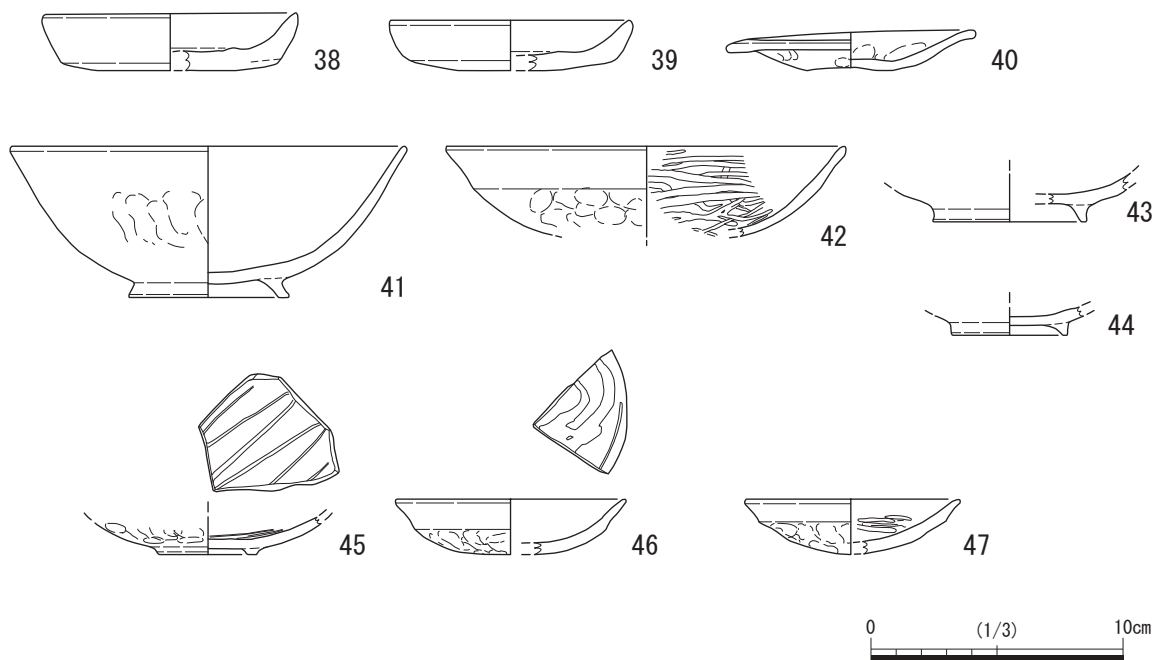


図27 重山宮裏遺跡出土土器実測図（3）（S=1/3）

側の尾根上に位置する（図24、図版13-1）。標高135.8mの西部（丸山）城跡から西へ派生する尾根の末端である。

昭和27（1952）年3月に橋田武氏によって調査が行われている〔橋田1963〕。橋田氏は報告の中で、この遺跡で多量に出土した回転台土師器のことを山杯と呼称している。その後、昭和36（1961）年頃にも児島公尊氏によって遺物の採集が行われている。埋蔵文化財包蔵地調査カードによると、傾斜部の土表下10～15cmくらいの層から、弥生土器、土師質土器等が出土したようである。

土師質土器の底部には、回転ヘラ切り痕や回転糸切り痕が見られる。また、底部の高台は、円盤高台と輪高台のものがある。回転ヘラ切りと回転糸切りの円盤高台の底部をもつ土師質土器の杯について、器形や大きさに明瞭な差は認められない。そのため、底部切り離し技法の差は、工人の違いによるものであって、これらの土器は同時代のものである可能性がある。底部切り離し技法の回転ヘラ切りから回転糸切りへの変換時期は、伊予周辺地域でも多少の違いがある〔中野1988〕。周辺地域の状況も考慮し、底部切り離し技法の変換を11世紀後半から12世紀初頭に求めるならば、その時期に2種類の底部切り離し技法の土器が混在することとなる。保元3（1158）年の石清水八幡宮文書に「石城島」という文字が現れることから、重山宮裏遺跡出土の山杯と呼ばれる土器群は、荘園時代初期の資料ということとなる。また、重山宮裏遺跡からは、在地系でない京都系土師器も出土している。

（2）遺物（図25～27、図版13-2・3、図版14・15）

1・2は弥生土器である。1は甕の口縁部で、口縁下に6条のヘラ描直線文が見られる。2は壺

の底部で、外面に種子痕を確認できる。1は弥生時代前期後半（Ⅰ－3様式）の所産である。

3～29は土師質土器の杯である。3～11の円盤高台底部外面には、回転ヘラ切り痕が見られる。10の底部には焼成前の穿孔があり、外面にスノコ痕を確認できる。12～25の円盤高台底部外面には、回転糸切り痕が見られる。15の底部外面に3条のスノコ痕を確認できる。19の底部外面には粘土片が付着している。26～29は貼付輪高台の杯である。26～28の底部外面には回転ヘラ切り痕が見られるが、輪高台の貼り付け後の接合痕がナデ消されていなく、作りが雑である。

30・31は土師器質土器の碗の底部で、輪高台が貼り付けられている。32・33は土師器質土器の杯である。33の外面には指頭圧痕が見られる。34は土師器質土器の碗である。吉備系土師器の可能性があり、外面に指頭圧痕、内面に板ナデ痕が見られる。小型であり、14世紀の所産であると思われる。

35～40は土師器質土器の皿である。35・39の底部外面には回転ヘラ切り痕、36・37の底部外面には回転糸切り痕が見られる。37の底部外面にはススの付着を確認できる。38は底部切り離し後に、外面に粘土が付け足されている。40は「て字状口縁」の京都系土師器であり、胎土が他の土師質土器と比較して精緻である。41は在地の土師質土器もしくは瓦器の可能性のある碗である。外面には指頭圧痕が見られる。

42～45は瓦器の碗、46・47は瓦器の皿である。42は和泉型瓦器碗で、器高が低く、内面には暗文（ヘラミガキ痕）が見られる。43～45は和泉型瓦器碗の底部で、45の内面には暗文（ヘラミガキ痕）が見られる。46・47は和泉型瓦器の皿で、内面には暗文（ヘラミガキ痕）、外面には指頭圧痕が見られる。42～47は12世紀末から13世紀前半にかけての所産であると考えられる。

（有馬啓介）

9. 土居ノ内（どいのうち）遺跡

所在地：上島町岩城884番地1、885番地1、886番地、887番地、888番地、889番地、890番地、891番地、892番地1、893番地、894番地、895番地、896番地、897番地、898番地、899番地1、900番地

調査日：平成25年11月13日

（1）遺跡の概要

土居ノ内遺跡は、岩城島の南部、鶴山と荒神山に囲まれた盆地のような地形の中に位置する（図28、図版16－1）。下方には亀山城跡、古城（岩城古城）跡、上方には荒神社や（伝）長法寺跡があり、周辺では五輪塔など中世石塔が散見される。「土居ノ内」という地名から、中世の島の実力者の居館があったのではないかと考えられている。ただし、採集遺物は少量である。13世紀代に位置付けられる龍泉窯系青磁碗と和泉型瓦器碗が確認されている。



図28 土居ノ内遺跡位置図 (S=1/5, 000)

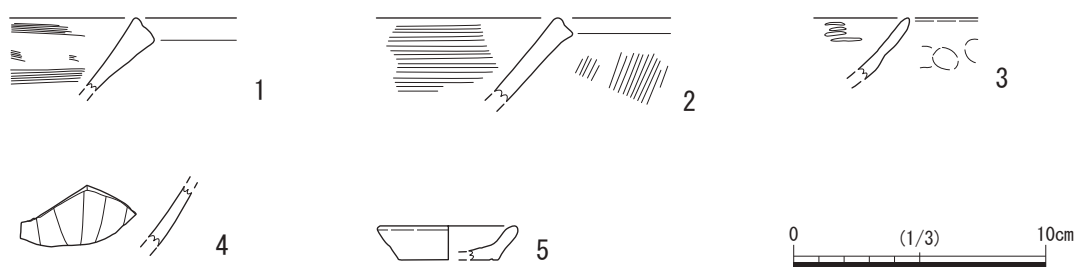


図29 土居ノ内遺跡出土土器実測図 (S=1/3)

(2) 遺物 (図29、図版16-2)

1・2は瓦質土器の鍋の口縁部である。15世紀以降の所産であると考えられる。3は和泉型瓦器碗の口縁部である。外面に指頭圧痕が見られ、内面にヘラミガキが施されている。4の青磁碗は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類〔横田・森田1978〕である。体部外面には鎬蓮弁文が施されている。5は土師質土器の皿である。底部切り離し痕は不明である。

(有馬啓介)

10. 小村（こむら）遺跡

所在地：上島町岩城735番地、737番地

調査日：平成25年11月13日



図30 小村遺跡位置図 (S=1/5,000)

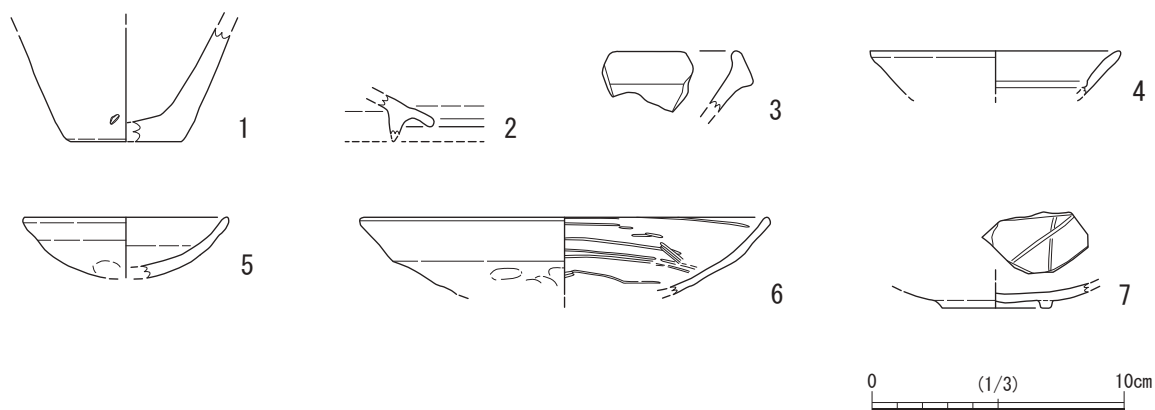


図31 小村遺跡出土土器実測図 (S=1/3)

（１）遺跡の概要

小村遺跡は、岩城島の南部、鶴山の東に位置する（図30、図版17－１）。土居ノ内遺跡は、尾根をはさんで小村遺跡から100mほど西にある。遺跡は、南に面し日当たりが良く、目前に岩城瀬戸、右手に亀山城跡、左手に古城（岩城古城）跡を望むなど見晴らしも良い場所に立地する。現在は緩やかな斜面を開墾した平らな畑地である。遺跡からは主として12世紀から13世紀にかけての貿易陶磁器や和泉型瓦器碗、東播系須恵器が採集されている。

（２）遺物（図31、図版17－２）

1は弥生時代中期の甕の底部である。外面に靱圧痕が見られる。2は須恵器の杯蓋の口縁部である。かえりが内面に見られ、下方にのびる。陶邑編年Ⅲ型式1段階に位置付けられる〔中村編1995〕。3は東播系須恵器の片口鉢の口縁部である。4は白磁の皿である。内面に1条の圈線が見られる。5～7は瓦器である。5は和泉型瓦器の皿であり、底部に指圧痕が見られる。6・7は和泉型瓦器碗であり、内面にヘラミガキが施されている。なお、6は『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書－埋蔵文化財編－』（愛媛県教育委員会文化財保護課編2002）で報告されている。東播系須恵器や和泉型瓦器は、12世紀末から13世紀前半の所産である。

（有馬啓介）

1 1. 高原（たかはら）遺跡

所在地：上島町岩城1004番地、1021番地1、1022番地、1026番地1

調査日：平成25年11月11日

（１）遺跡の概要

高原遺跡は、岩城島の南部、積善山の南麓に位置する（図32、図版18－１）。現在は緩傾斜の柑橘畑になっている標高55～75mの地点に立地する。空久保遺跡同様に弥生時代中期中葉の土器も見られるが、和泉型瓦器碗や青磁碗などの中世の遺物も多く採集されている。

（２）遺物（図33、図版18－２・３）

1・2は弥生土器である。1は広口壺の口縁部で、その端部が下方に若干拡張している。弥生時代中期中葉（Ⅲ様式）の所産である。2は弥生時代中期の甕の底部である。

3は古代の須恵器の口縁部である。

4～7は瓦器である。4～6は和泉型瓦器碗で、内面に暗文（ヘラミガキ痕）が見られる。7は和泉型瓦器の皿である。いずれも12世紀末から13世紀前半にかけての所産である。8・9は青磁碗で、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5b類〔横田・森田1978〕である。体部外面には鎬蓮弁文が施されてい



図32 高原遺跡位置図 (S=1/5, 000)

る。10は土師質土器の三足羽釜の脚部である。外面に指圧痕が見られる。

11はサヌカイト製のスクレイパーである。大きく欠損している。長さ3.1cm、幅3.9cm、厚さ1.1cm、重さ12.83gである。12は高原遺跡付近（積善山南麓）で採集された蛇紋岩製の小型の磨製石斧である。弥生時代の所産で、使用痕から再生利用品であると考えられる。長さ8.7cm、幅4.5cm、厚さ2.7cm、重さ181.26gである。

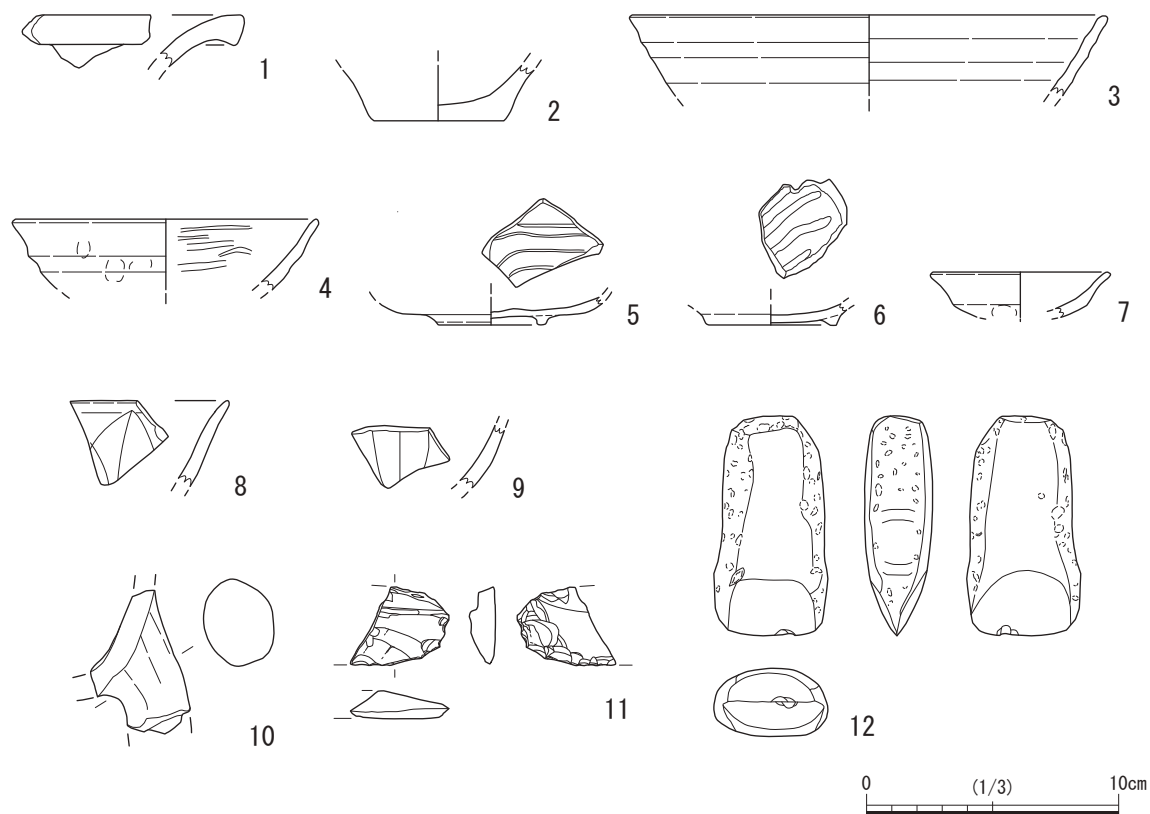


図33 高原遺跡出土土器・石器実測図 (S=1/3)

(有馬啓介)

【参考文献】

- 岩城村郷土誌編集委員会編1970『伊予岩城島の歴史』（上巻）岩城村教育委員会
- 岩城村誌編集委員会編1986『岩城村誌』上巻 古代・中近世編、岩城村
- 愛媛県教育委員会文化財保護課編2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書－埋蔵文化財編－』愛媛県教育委員会
- 柴田昌児 2012「瀬戸内海における製塩考古学の現状と課題」『中国の塩業考古学を学ぶ－佐島・宮ノ浦遺跡がつなぐ山東と愛媛－』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター
- 長井数秋 1982「第一章 文化のあけぼの」『愛媛県史』原始・古代Ⅰ、愛媛県史編さん委員会編、愛媛県
- 中野良一 1988「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ、日本中世土器研究会
- 中村浩編1995『須恵器集成図録』第1巻 近畿編Ⅰ、雄山閣出版株式会社
- 橋田武 1963『岩城村埋蔵文化財の研究』
- 横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館

第4章 調査の成果と今後の課題

本書では、平成25年度から平成27年度にかけて岩城地区で実施した町内遺跡詳細分布調査のうち特に多くの遺物が確認された主要な遺跡について報告を行った。報告した遺跡は、第3章で取り上げた11遺跡である。以下に、調査成果と今後の課題をまとめる。

縄文時代後期を中心とした土器が多量に出土した小漕遺跡、長江遺跡、船越遺跡は、いずれも農業用井戸や池を掘削中に発見された。これまで周辺で採集された縄文土器は、元来地下の遺物包含層や遺構に含まれていた遺物で、踏査では地下深くにある遺跡の平面的な広がりを確認できない。将来的に遺跡の実態を詳細に把握するためには試掘・確認調査が必要とされる。これらの遺跡は海岸に近い低地に立地するため、当時の自然環境と生活基盤を考察するうえで重要な遺跡である。

小漕遺跡周辺で発見されたサヌカイト製の石庖丁は、弥生時代に岩城地区でも稲作農耕を行っていたことを証明する重要な資料である。現在でも岩城島小漕では、瀬戸内海の島は珍しく水田風景が見られ、古くから稲作農耕を行う環境が整っていたことが分かる。空久保遺跡と積善山遺跡は、岩城地区の弥生時代の代表的な遺跡である。空久保遺跡は積善山から南へ続く丘陵上の標高70～80mの地点に位置し、積善山遺跡は標高369.8mの積善山の山頂部に位置する。空久保遺跡では、弥生時代中期中葉の土器や多量のサヌカイト製の石器や剥片が採集されている。高地性集落の性質とは異なり、農業や狩猟を生業とする「山住みの集落」の研究が行われているが〔柴田2006〕、空久保遺跡も「山住みの集落」に該当すると考えられる。高地性集落として著名な積善山遺跡では、弥生時代中期後葉の凹線文土器が確認されている。その立地から居住域ではなく、海上交通のランドマークとしての機能を備えていた可能性がある。

岩城地区の古墳時代の製塩遺跡として石風呂海岸遺跡と赤石遺跡が挙げられるが、小漕遺跡、長江遺跡、船越遺跡でも古墳時代の製塩土器が出土している。今後も製塩遺跡の立地と変遷を調査する必要がある。現在、弓削地区では弓削島荘総合調査事業として、塩田を主とした製塩遺跡の試掘・確認調査を実施しているが、他の地区でもその調査手法を活かすことが期待されている。

中世初期を代表する遺跡である重山宮裏遺跡では、多量の土師質土器とともに京都系土師器が出土している。岩城島の荘園領主が石清水八幡宮であったことから、都との関係や交易等を考えるうえで貴重な資料である。また、土師質土器の中には底部内面が深く窪む特徴的なものもあり、他の地域の調査事例を参考にしながら使用用途を究明する必要がある。

積善山南麓にある土居ノ内遺跡、小村遺跡、高原遺跡では、貿易陶磁器や和泉型瓦器などの荘園時代の遺物が比較的多く採集されている。中世の岩城島での出来事は、弓削島荘の記録が多く残る『東寺百合文書』にも記載されており、遺跡詳細分布調査によって解明される歴史的事実は少なくない。

遺跡詳細分布調査は、町内全域で均質な調査を行うことで埋蔵文化財包蔵地を把握し、その適切な保護・活用を図るために実施されている。本書で報告した遺跡以外の岩城地区の埋蔵文化財包蔵

地については、すでに現地踏査は終了しており、他の地区と併せて成果報告を行う予定である。また、遺跡詳細分布調査終了後も、開発事業等に対して適切な対応を行うために、試掘・確認調査を含めた遺跡の把握に努める必要がある。

(有馬啓介)

【参考文献】

柴田昌兎 2006「中・西部瀬戸内の高地性集落と山住みの集落－特に燧灘～伊予灘・安芸灘沿岸域を中心として－」『古代文化』第58巻第Ⅱ号、古代学協会

丸串古墳発掘調査報告

第1章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

丸串古墳の所在する赤穂根島は瀬戸内海のほぼ中央部にあり、芸予諸島のうち岩城島などとともに上島諸島に属する面積2.09km²の島である。北に岩城島、南西に津波島、東に佐島が位置している。そして南は燧灘に面している。平成16年（2004）年10月1日に周辺1町3村（越智郡弓削町、同生名村、同岩城村、同魚島村）が合併し上島町となった。合併以前は越智郡岩城村に属していた（図1・34）。

地形は島内には標高100m以上のピークが3箇所あり、南東側の急斜面山頂部が最高地点で標高は159.1mである。これらの丘陵から伸びる樹枝状丘陵とその開析谷および海岸部から構成される。丘陵部は総じて急峻で、平坦部は開析谷および砂浜海岸のみである。島の中央部に北向きの谷があり、海岸にかけてややまとまった平坦地がある。島の南東部は崖状を呈する岩礁海岸であり平坦面はない〔野口1992〕。

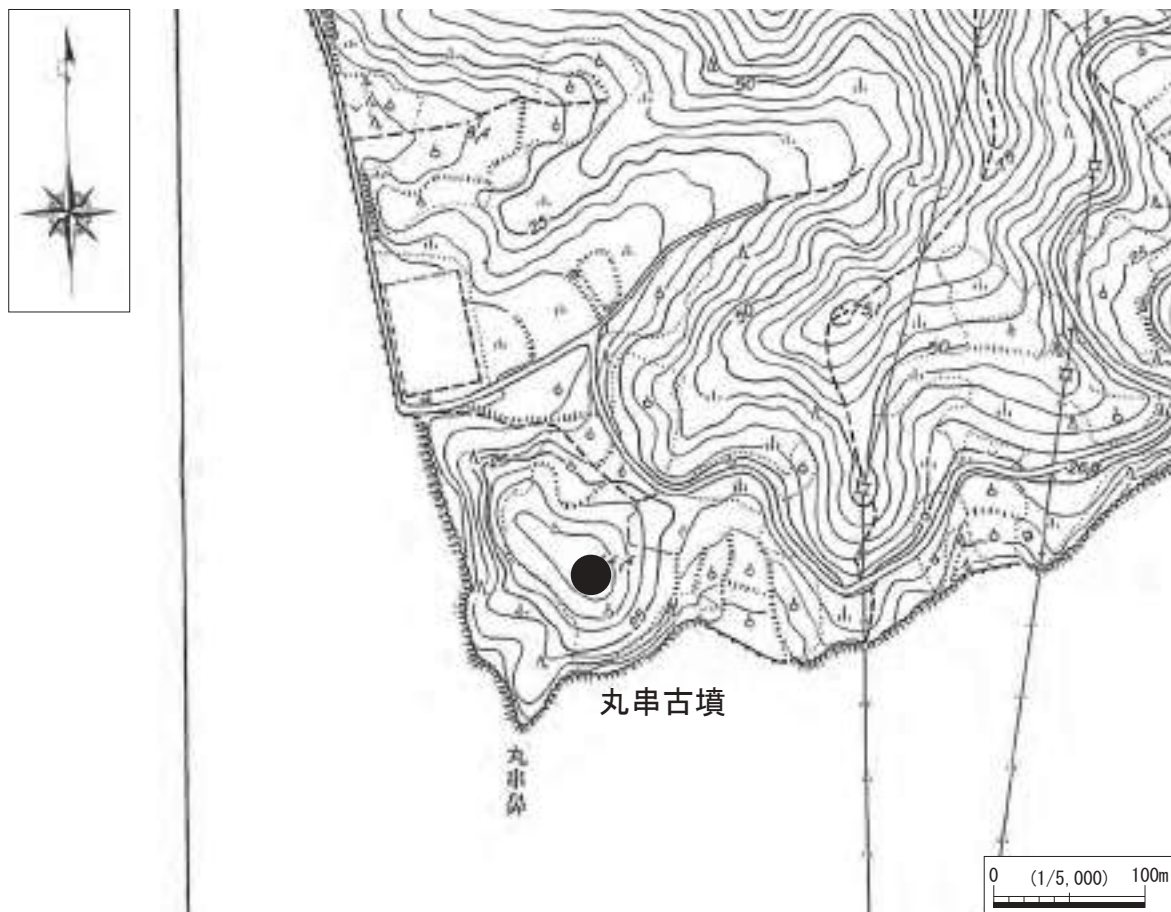


図34 丸串古墳位置図 (S=1/5,000)

地質は中央構造線北側の内帯である領家帯に属し、主に広島花崗岩と呼ばれる中～粗粒の黒雲母花崗岩からなる。広島花崗岩は風化しやすく、10～30mの厚い風化殻をつくりマサとなる〔日本の地質「四国地方」編集委員会編1991〕。マサは、雨水による侵食に弱く、保水力もないため土壌の発達が悪く、尾根や傾斜が急なところでは植生が疎である〔山本・小川・宮脇2007〕。

丸串古墳は岩城7302外に所在し、赤穂根島南西端の「丸串鼻」に向かう丘陵頂部に立地している。津波島全体を見下ろす標高約44mに位置しており、四国山脈も遠望することが可能である。

(有馬啓介)

2. 歴史的環境

赤穂根島の北300mに位置する岩城島は、中世には石清水八幡宮の荘園として栄え、近世には伊予松山藩の本陣が構えられるなど、弓削瀬戸と伯方瀬戸を通過する瀬戸内海交通の要衝であり、関連する文献資料が中世以降多くみられる。一方で対岸の赤穂根島に関する文献資料は極めて少ない。

そのような中でわずかではあるが、赤穂根島の本向と初浜の境に所在する「塩垂比丘の碑」が、享和3（1803）年に著された「伊予古蹟志」や「伊予温故録」にも記載され、民間伝承にも伝わっている。また、この石塔のそばの丘の上には八幡宮が一社建てられていたことが、「越智島旧記」に記されていること〔岩城村誌編集委員会編1986 a〕から、中世や近世の段階にも人々の利用が一定程度存在していたことがうかがわれる。

明治13（1880）年に記された「岩城村地誌」によると、赤穂根島には人家4戸があり、男9人女10人の合計19人が住み、農業を専業としていることが記されている。また、作物は稲、粟、麦、甘藷であり、山には樹木が少なかったとある〔岩城村誌編集委員会編1986 b〕。昭和26（1951）年頃までは人が住んでいたが、以後、無人島になり、岩城島の住民が出作りで稲作、畑作、果樹栽培を営んでいる。昭和47（1972）年の調査では、水田5.5ha、畑52.9ha となっている〔岩城村誌編集委員会編1986 b〕。上島諸島は昭和36（1961）年に離島振興法の適用を受けている。昭和56（1981）年からは農村基盤整備地区として団体営樹園地農道網整備事業により、赤穂根島に農道が整備された。現在は2名が住民登録しており、岩城島からの出作りも行われている。レモンや晩柑類など柑橘栽培が中心で、稲作と芋などの小規模な畑作は北部の低地にみられる。耕作者の高齢化などにより、多くの農地が放棄されつつある〔山本・小川・宮脇2007〕。

(笹田朋孝)

3. 周辺の遺跡（図2）

赤穂根島ではリゾート開発計画に先立ち、同島に所在する埋蔵文化財の有無の確認および、遺

跡の概要を把握することを目的とした、試掘調査が平成4（1992）年に実施されている〔野口1992〕。広範な赤穂根島のごく一部を試掘しただけにも関わらず、多数の遺跡と多くの遺物を得られている。その後、上島町教育委員会によって遺跡詳細分布調査が行われている。その成果をもとに、赤穂根島の遺跡の概況について述べていきたい。

赤穂根島では旧石器時代の資料は確認されていないが、南西の津波島では後期旧石器時代のナイフ形石器などが報告されている〔池尻2003〕。縄文時代に入ると遺跡の数が急増し、大三谷遺跡（縄文時代後期・晩期の土器、スクレイパー・石錘）・中三谷遺跡（縄文時代後期・晩期の土器）・小三谷遺跡（縄文時代後期と思われる土器）・竹ノ浦遺跡（縄文時代後期の土器）などの規模の大きな谷部では、ほぼ縄文時代の遺物が出土している。これ以外に、植松遺跡では縄文時代のものと推測される石鏃が出土している。

弥生時代の遺跡の確認例は少なく、大手原遺跡と赤穂根島遺跡で弥生時代後期の土器が出土している。しかし丘陵部の調査がこれまで行われていないため、芸予諸島の特徴である比較的高地に営まれる凹線文期の集落の存否は不明である。

古墳時代では大三谷遺跡（古式土師器・製塩土器）・矢櫃遺跡（古式土師器）・竹ノ浦遺跡（古式土師器・製塩土器）・初浜遺跡（古式土師器）・逢遺跡（古式土師器）など、古墳時代前期の遺跡が多く、製塩土器を伴うことから海浜部での製塩活動に従事した遺跡であると考えられている。

古代から中世の遺物は多くの遺跡で確認されており、竹ノ浦遺跡（土師器・須恵器・瓦器・製塩土器）・大手原遺跡（土師器・陶器）・植松遺跡（土師器・瓦器・鋤滓）などは、やや大きな谷部に営まれた拠点集落であったと考えられている。発掘は行われていないが、竹ノ浦城跡や赤穂根八幡山城跡、高畠山城跡などの中世城郭が確認されている。近世以降の遺物の散布地も数多く確認されており、海に面したやや大きな谷部では古墳時代あるいは古代以降には、連綿と生活が営まれていた可能性が高いといえる。

（笹田朋孝）

第2章 調査の経緯・体制・経過

1. 調査経緯と目的

愛媛県埋蔵文化財包蔵地調査カードNo23-014をみると、昭和56（1981）年に芝田幸光・児島公尊氏によって現況が調査・報告されている。カードには「数枚の石で造られた石棺が崩れ、奥に被葬者のものと思われる人骨片が露見している」、「赤穂根南部、津波島全体を見おろす標高44m位の所にあり、四国山脈も遠望できる。墳丘半分は崩壊し、流出が続いている」、「人骨は放置されたままで、腐食の恐れあり」とある。また、『愛媛県内古墳－分布調査報告書－』では「丸串古墳は、墳丘半分が崩壊、流出しているが、円墳（径15m）と考えられ、内部主体は花崗岩製の箱式石棺である。今回の調査者によると、石棺の損壊が進行し、被葬者の人骨が露見しているという。また、当該石棺から7～8m北側でも、石棺石材2～3枚が散見できそうで、本墳が1墳丘2石棺墳の可能性も十分にある。なお、出土遺物はない」とある〔谷若1991〕。

遺体を収めた箱式石棺の存在はかねてより知られていたが、耕作や木の根の影響を受け、かなり崩壊が進んでいた。また、石棺内には人骨片が露見しており、一刻も早い対応が求められていた。

このように崩落の危険があるため、移築復元するための古墳構造等の基礎資料を得ることを目的として調査を実施した。なお、調査は、上島町教育委員会が平成25年度から国庫補助事業として実施している上島町内遺跡発掘調査等事業として行い、平成27年7月17日付け27上教第634号で愛媛県教育委員会へ埋蔵文化財発掘調査届出書を提出した。

（有馬啓介）

2. 調査体制

丸串古墳の発掘調査は、愛媛県教育委員会文化財保護課との協議を踏まえ、愛媛大学考古学研究室が上島町教育委員会と協力して実施することとなった。実施体制は次の通りである。なお、事務局の体制は、上島町内遺跡詳細分布調査報告の第2章2の通りである。

測量調査担当：愛媛大学考古学研究室（代表：村上恭通）

村上恭通（愛媛大学教授）、笹田朋孝（同准教授）、ダシボンツァグ・グルラグチャー（修士課程1年）、八木宏明（研究生）、白川泰嵩（4回生）、小田原あかね、織田誠司、大山裕矢、中野眞衣、濱本晶、加藤新（3回生）、持永壮志朗（2回生、以上愛媛大学）、西垣克哉（高知大学4回生）

発掘調査担当：愛媛大学考古学研究室（代表：村上恭通）

発掘調査の参加者は次の通りである。

村上恭通（愛媛大学教授）、笹田朋孝（同准教授）、柳本照男（韓国・東洋大学校教授）、ダシポンツァグ・グルラグチャー（修士課程2年）、西垣克哉（修士課程1年）、小田原あかね、織田誠司（4回生、以上愛媛大学）

3. 調査経過

（1）踏査

平成20（2008）年4月29日（火）に愛媛大学考古学研究室で赤穂根島の遺跡踏査を実施した。これは島内全体の遺跡の現状を把握することを目的としたが、その一環で丸串古墳の現況確認を行った。その結果、丸串古墳の崩壊がかなり進行しており、早急な対応が必要であることが確認された。

赤穂根島への渡航などでは村上律子氏のご支援をいただいた。現地踏査では児島公尊氏のご指導ならびにご支援をいただいた。

（2）測量調査

測量調査は平成27（2015）年3月27日（金）から3月31日（火）まで実施された。夏季に予定された発掘調査に先立ち古墳の現況を記録に残すために、周辺の地形測量を行うとともに、石棺と周辺に散乱した石の実測図を作成した。

公共の交通機関の存在しない島での調査であったため、岩城島から赤穂根島への渡航や島内の移動では、児島公尊氏や宮脇馨氏、村上律子氏のご支援をいただいた。

（3）発掘調査

発掘調査は平成27（2015）年8月1日（土）から8月10日（月）までの期間に、弓削佐島の宮ノ浦遺跡第5次調査と併行して実施した。調査にあたっては、崩壊しつつある箱式石棺に露見している人骨を検出すること、箱式石棺の構造を解明すること、石棺や墳丘からの崩落土を篩い掛けして副葬品などを検出することなどを目的とした。

公共の交通機関の存在しない島での調査であったため、岩城島から赤穂根島への渡航や島内での移動にあたっては、児島公尊氏や宮脇馨氏、村上律子氏のご支援をいただいた。

現地へのアクセスが極めて困難なため、地元住民への現地での説明会は開催できなかった。その代わりに佐島の宮ノ浦遺跡第5次調査の現地説明会の会場で、調査成果を地元の方々に紹介した。その際に作成したA4裏表1枚の「赤穂根島所在 丸串古墳発掘調査成果速報」は、上島町教育委員会のホームページ（<https://www.town.kamijima.lg.jp/soshiki/shogai-gakushu/6639.html>）に掲

載されている。

（４）謝辞

丸串古墳の調査にあたっては地権者である竹井清幸氏、林久義氏、大本明光氏、西原久司氏のご理解とご協力があったはじめて可能となりました。また、赤穂根島に居住する宮脇馨氏、岩城島の児島公尊氏（故人）に大いにお世話になりました。心から感謝を表します。

現地調査や生活全般において、村上知貴氏、村上律子氏、村上友美氏、NPO法人弓削の荘のみなさまには格別なご配慮、ご支援を頂戴しました。

ご指導、ご協力頂きました多くのみなさまに記名して衷心より感謝申し上げます（敬称略）。

児島公尊、柴田昌兎、田中謙、谷若倫郎、宮脇馨、村上知貴、村上律子、村上友美

（笹田朋孝）

第3章 調査の成果

1. 測量調査の成果

墳丘の20cmコンターの地形測量図（図35）と箱式石棺の現況の実測図（図36）を作成した。測量にあたっては、基準となる複数の杭の座標をGPS（Magellan社 ProMark 3）で長時間測定を行い、電子基準点とのGNSS後処理を実施している。図35には世界測地系で平面直角座標系第Ⅳ系（原点は東経133度30分00秒、北緯33度00分00秒）の数字を記載している。主体部の箱式石棺は平成20（2008）年の踏査時と比較して更に崩壊が進んでおり、畑の耕作や浸食により墳丘部もかなり失われていた。箱式石棺は北東－南西方向に主軸をもち、かろうじて北西側壁、北東小口壁の棺材と蓋石が残存していた。その他の棺材は南側の斜面をずり落ち、周囲に散乱していた。残存する蓋石の上には土が堆積し、礫が積み上げられていた。その上には瓦祠の一部や陶磁器片、ガラス片が散乱していることから、最近まで信仰の対象とされていたようである。

2. 発掘調査の成果

（1）調査の方法

現地保存を前提とする学術発掘であったため、箱式石棺は記録を作成しながら現位置を留めていないと判断された石を外したのち、唯一原位置を留めていた北東側の蓋石を外し、長軸方向ならびに短軸方向での棺材の設置方法をそれぞれ確認した。そしてわずかに残っていた石棺内の土壌（図37の網掛け部分）を発掘し、人骨の検出に努めた。石棺内の土壌も後述する崩落土と同様に篩い掛けを行い、微細な資料の検出に努めた。

一方、石棺を含む古墳の多くの部分がすでに崩落しており、石棺内の副葬品や人骨が南側の平坦面に散布していることが想定された。そこで石棺の長軸方向5 m×短軸方向4 mの範囲を設定し、その中に1 m四方のグリッドを合計20個設定した（図38）。そのうち南側のグリッド（図38の塗り部分）でそれぞれ上から10cmごとに人工層位で土壌を採集し、篩い掛けを実施した。

調査終了後はこれ以上の崩壊を防ぐために土嚢を積み上げて補強し、後日、蓋石などをもとの位置に戻した。

（2）墳丘

発掘調査を実施する以前は、墳丘状の高まりの存在から規模の想定は様々であったものの、丸串古墳は墳丘を持つ古墳として認識されてきた。しかしながら、発掘調査を行い石棺の外側を小さなサブトレンチで確認したところ、表土の直下には地山と考えられる花崗岩のバイラン土しか確認さ

れなかった。地山を削り出した可能性は完全に否定できないものの、土を盛り上げた墳丘の存在は疑わしい。

（３）石棺

石棺の石材はいずれも花崗岩であった。根による影響が若干みられるものの、おおよその原位置を保っていたのは、北東側の短側石１枚と北西側の長側石（北東側）１枚とその上に載せられた蓋石１枚であった（図37）。北西側の長側石（南西側）は土壌の流出と根の圧迫により南側にずれていた。それ以外の棺材は大きく動かされており、南側の斜面や平坦面に散乱していた。これらをすべて集めた結果、蓋石４枚（図版21－６）、長側石３枚、短側石１枚を確認することができた。蓋石１枚、南西側の短側石１枚、南東側の長側石１枚についてはこの調査で確認することができなかった。

これらの状況から復元すると、短側石は１枚で小口とし、長側石は２枚を平接ぎして長側辺とし、それらが口の字をなすように設置され、その上に５枚の蓋石が載せられていたと推測される。石棺の内側の大きさは長軸165～170cm×短軸40cmに復元される。

石棺内部にはわずかであるが床土が残存していた（図37の網掛け部分）。その下には礫が確認されており、礫を敷いた上に粘土を貼って床としていたと推測される。そして残存していた石棺の北東部の床にはおそらく側頭葉と考えられる頭蓋骨の一部が遺存していた。石棺内部の土壌も篩い掛けを行った結果、時期不明の小さな土器片が２点と、頭蓋骨と歯が出土している。

短軸方向の断面図（図37）の観察所見から、長側石は地山である花崗岩のバイラン土を深く掘り込んだ掘方に立てられており、その掘方の裏側には裏込め土（５層）が入れられている（図版21－３）。しかし、この裏込め土（５層）は木の根の浸食が著しいため、本来の裏込めの様相は判然としない。また、石棺の床には削り出した地山の上に粘土（４層）を敷きつめていた。一方、長軸方向の断面図（図37）をみると、石棺の短側石は長側石に比べて長さ（深さ）が短く（浅く）、短側石の下に見られる礫の上にも床面と考えられる土（４層）が入り込むことから、この礫は短側石を立てる前に置かれたものである（図版21－２）。

これらの所見から、地山を掘り込み、まず長側石を設置し裏込めで安定させたのち、棺内に礫を敷き、その上に粘土を敷き床とした。そして、口の字になるように短側石を設置し、裏込め土で安定させる順番で石棺が構築されたと考えられる。

（４）出土遺物

発掘調査ではほとんど遺物が出土しなかった。石棺内からは、上述したように頭蓋骨の破片と歯（切歯や臼歯）７本が出土している。

それ以外の遺物は石棺外の出土であり、多くは南側の崩落土中であつた。そのような中で、５世紀代と考えられる製塩土器片が石棺南側のＡ３区から出土している（図版22－３）。丸串古墳に伴うものであると断言することができないが、本調査で出土した唯一の古墳時代の遺物である。それ

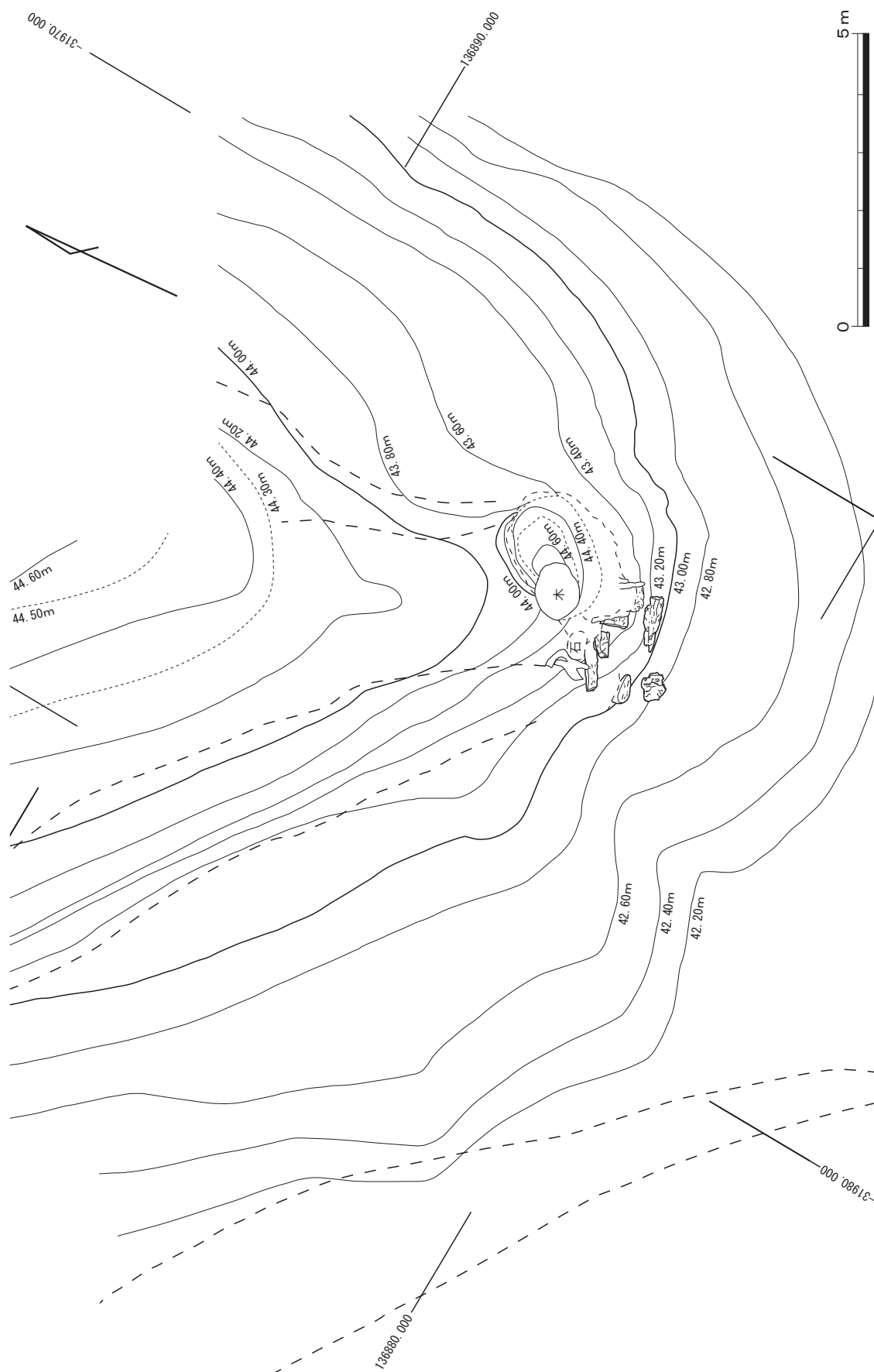


图 35 地形測量図 (S=1/100)

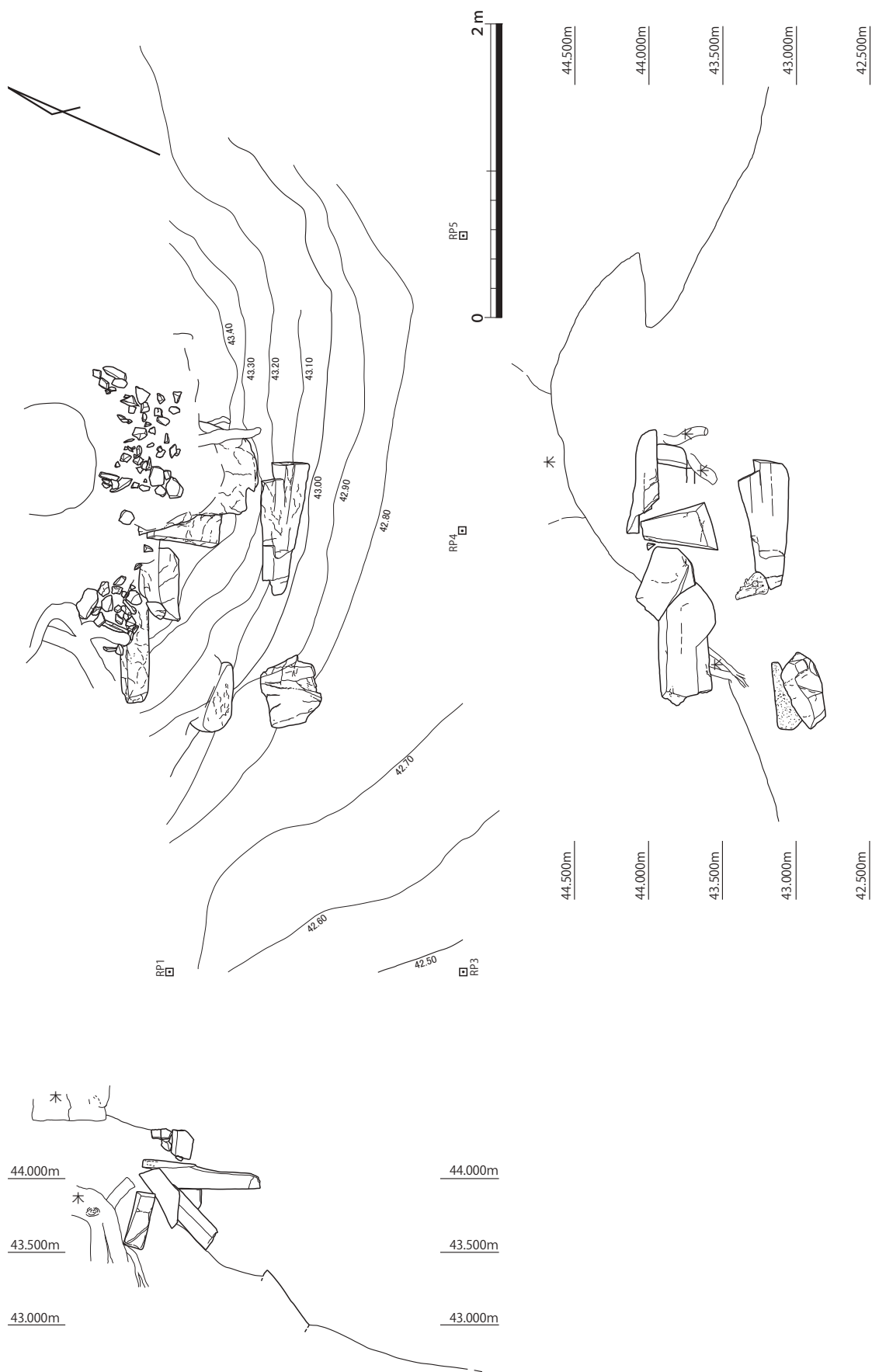
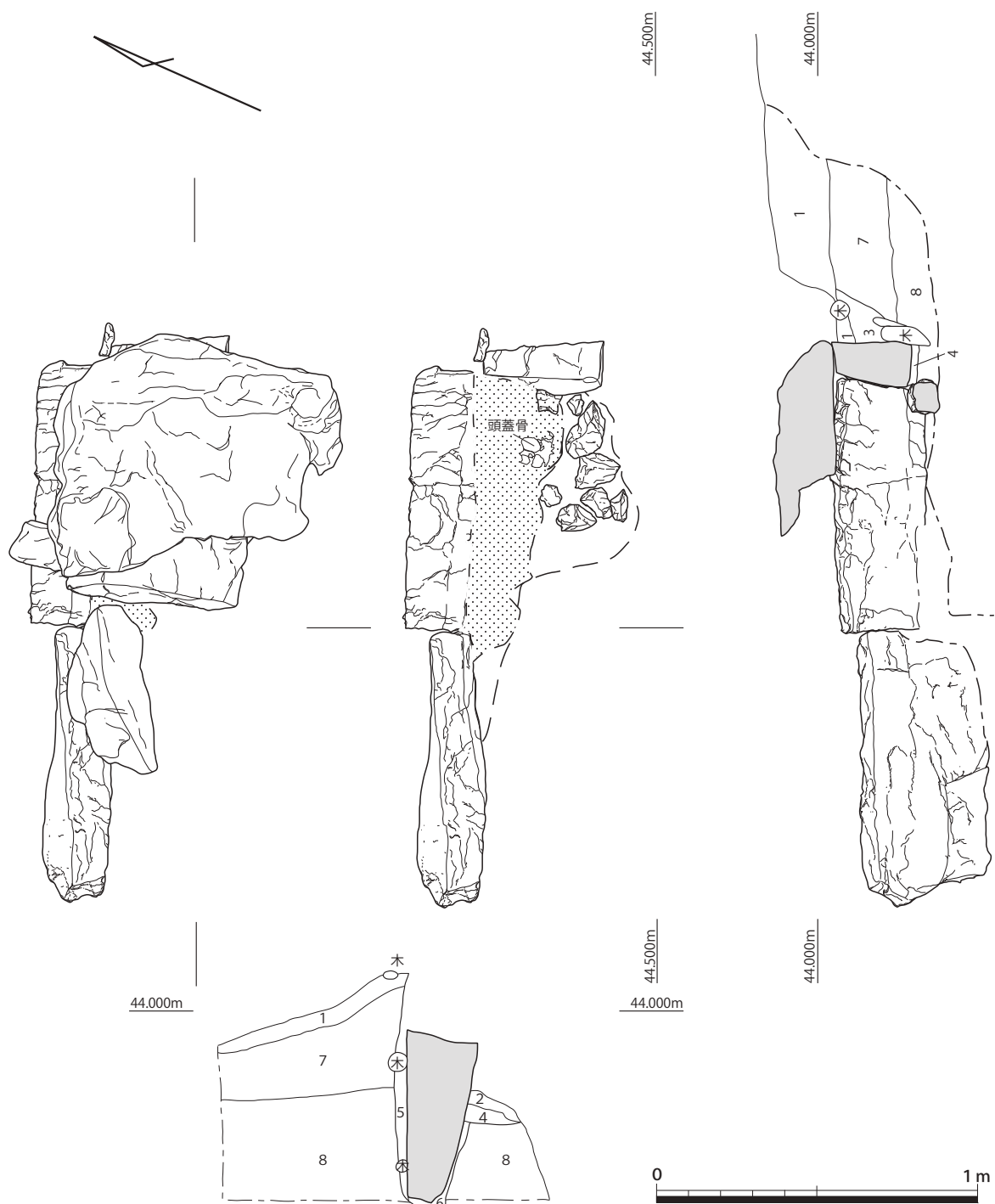


図 36 石棺周辺平面図・立面図 (S=1/40)



1. 暗褐色 (10YR3/3) を呈する微粒砂主体の土層。細礫をわずかに含む。しまり、粘性はなく、さらさらしている。表土である。
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) を呈する腐植土層。極細粒砂主体で2～3mm程度の細礫をわずかに含む。根を多く含み、さらさらしている。しまり、粘性はない。
3. にぶい黄橙色 (10YR6/3) を呈するシルト・極細粒砂主体の土層。2～4mmの細礫を多く含む。木の根の浸食を受けており、判然としないが掘方の可能性がある。地山と比べてやわらかい。
4. にぶい黄褐色 (10YR5/3) を呈する極細粒砂主体の土層。2～4mm程度の細礫と5mm程度の中礫をまばらに含む。基質は同色のシルトである。しまり、粘性はない。
5. 褐色 (10YR4/4) を呈するシルト・極細粒砂主体の土層。2～4mm程度の細礫と10mm程度の中礫をわずかに含む。やわらかい質感。
6. にぶい黄橙色～にぶい黄褐色 (10YR6/4～10YR5/4) を呈するシルト主体の土層。極細粒砂と2～4mmの細礫を含む。しまり・粘性はない。花崗岩のバイラン土。
7. にぶい黄橙色 (10YR6/4) を呈するシルト・極細粒砂主体の土層。2～4mm程度の細礫を50%程度含む。しまり・粘性はない。花崗岩のバイラン土。8層と比べて土壌化している地山である。
8. にぶい黄橙色 (10YR6/4) を呈する4mm程度の細礫主体の土層。10mm程度の中礫をまばらに含む。シルトを30～40%含む。花崗岩のバイラン土を基調とした地山である。

図 37 石棺平面図・断面図 (S=1/20)

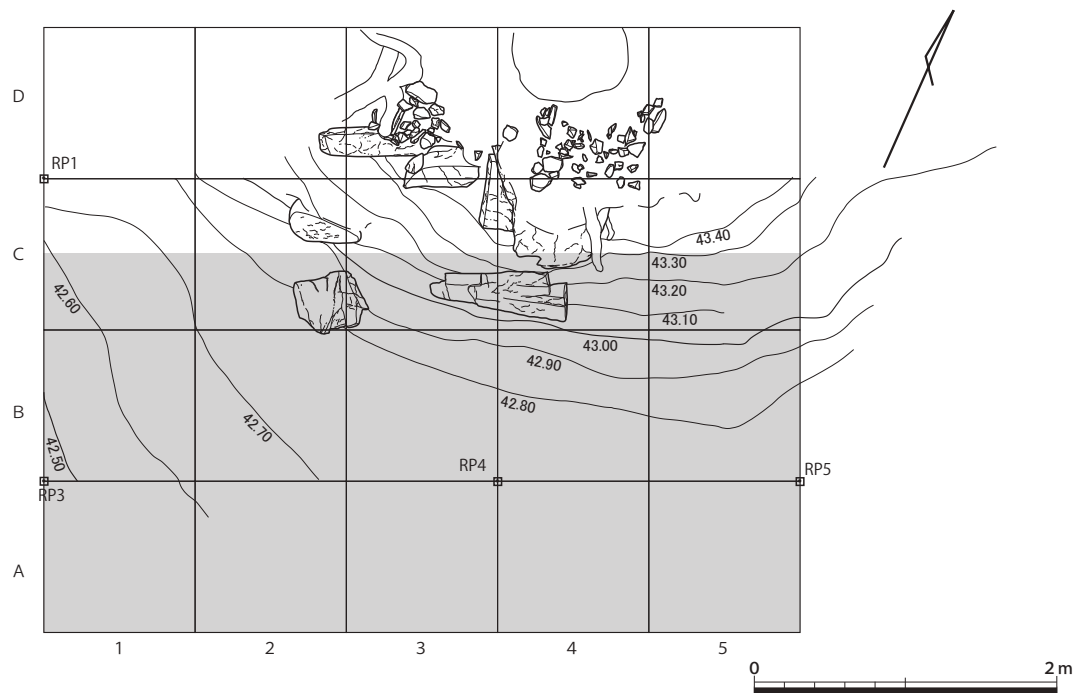


図 38 篩い掛けの範囲 (S=1/50)

以外には、近世以降の陶磁器や瓦、軽石製品、陶製ボタン、鉄鎌などが出土しているが古墳に伴うものとは考え難い。

(笹田朋孝)

第4章 年代測定結果

1. はじめに

丸串古墳（愛媛県越智郡上島町の赤穂根島に所在）は、赤穂根島の南西部に位置する古墳である。今回、古墳の年代に関する検討を行うために、箱式石棺墓の内部から出土した人骨について放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料

箱式石棺墓の内部から出土した骨で、平成26（2014）年10月27日に採取されている。大きさ3.7cm×2.7cm、厚さ約0.6cm、乾燥重量3.3 gを測る。特徴的な部位がみられないが、扁平な破片であることから頭蓋片とみられ、種類は大型哺乳綱、ヒトの可能性はある。

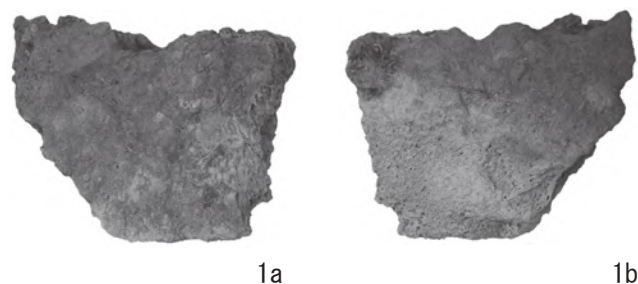
3. 分析方法

骨試料はコラーゲン抽出（Collagen Extraction）を行う。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土壌等の付着物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉碎用セルに入れ、粉碎する。リン酸塩除去のため試料を透析膜に入れて1 Mの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

抽出した試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させ、液体窒素とエタノール＋ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインでCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10 時間以上加熱し、グラフアイトを生成する。

化学処理後のグラフアイト・鉄粉混合試料を内径1 mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3 MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグランド試料の測定も行う。ま



1. ヒト頭蓋骨（丸串古墳箱式石棺墓出土骨）

写真1 出土骨

た、測定中同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を起点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1（Copyright 1986–2015 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することである。暦年較正は、CALIB REV7.0のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

4. 結果および考察

放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を表1、図39に示す。同位体効果の補正を行った測定結果（補正年代）は、 $790 \pm 20\text{BP}$ である。また、暦年較正結果は測定誤差を 2σ で計算した場合がcalAD1,216～1,273（calBP734～677）、 1σ で計算した場合がcalAD1,224～1,263（calBP726～687）である。

したがって、埋葬されていた人骨は、13世紀代頃に死亡したと推定される。これより、本古墳の箱式石棺墓は少なくとも13世紀前半頃まで利用されていた可能性がある。ただし、追葬などが行

われている可能性もあることから、古墳の構築時期などに関しては古墳への埋葬人数や埋葬状況の把握、さらなる年代測定の実施など今後の調査の進展に期待がかかる。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

表 1 放射性炭素年代測定結果

種類	処理方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No.
					誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
大型哺乳綱 (ヒト?) 頭蓋骨	CoEx	720 $\pm$ 20	-20.60 $\pm$ 0.37	790 $\pm$ 20 (789 $\pm$ 23)	σ	cal AD 1,224 - cal AD 1,236	cal BP 726 - 714	0.338	IAAA-150188
						cal AD 1,241 - cal AD 1,263	cal BP 709 - 687	0.662	
					2 σ	cal AD 1,216 - cal AD 1,273	cal BP 734 - 677	1.000	

- 1)処理方法のCoExは、コラーゲン抽出を示す。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
4)付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
5)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1（Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。
6)暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、1桁目を丸める前の値を使用している。
7)年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、2 σ は95.4%である。
9)相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

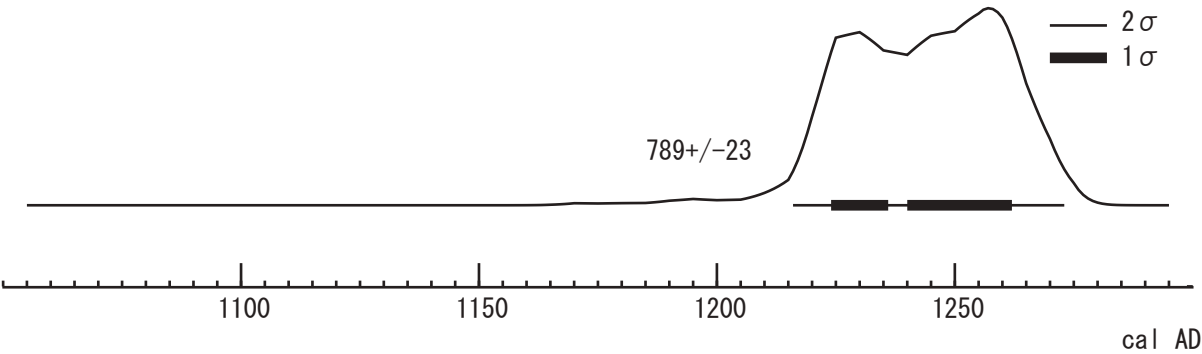


図39 暦年較正結果

第5章 調査の成果と今後の課題

丸串古墳は芸予諸島の島嶼部の箱式石棺を考えるうえで重要な古墳であり、崩落の危機から早急な調査と保全が求められてきた。今回の調査では、崩壊しつつあった石棺の記録作成ならびに構造把握を行い、崩落土の中の遺物の回収に努めた。これまでは墳丘の存在が指摘されてきたが、発掘調査の所見としては、遺存状態が悪かったものの、地山である花崗岩のバイラン土を直接掘り込む形で箱式石棺が設置されており、墳丘の存在は考えにくいことが考えられた。また、南側の崩落土の篩い掛けで古墳時代の製塩土器が1点出土した。

箱式石棺の形状や芸予諸島の箱式石棺の多くが古墳時代に属することから、丸串古墳の箱式石棺は古墳時代のものであると考えられてきた。調査の所見としても、礫を敷いた上に粘土を貼って構築された棺内の床面、口の字に規則正しく配置された長側石と短側石、そしてその上に載せられた蓋石などから、古墳時代の遺物がほとんど出土していないものの、古墳時代の箱式石棺の可能性が高いといえる。

一方で、発掘調査に先立って上島町教育委員会が実施した、石棺内から採取された人骨の放射性炭素年代測定結果は、 2σ でcalAD1,216~1,273 (calBP734~677) の年代を示している。つまり石棺内に中世の人骨が入っていたこととなる。しかし発掘調査では明らかに中世と考えられる遺物は1点も出土していない。

現時点では古墳時代の箱式石棺の中に中世の人骨という事実を整合的に説明することは困難である。今後は人骨の年代測定を再度行うことと、中世の箱式石棺の類例を探ることなどを行っていきたい。また、骨考古学の専門家と協同して、人骨や歯の資料から島嶼部に住んだ人々の人類学的な特性について研究を進めていきたいと考えている。

(笹田朋孝)

【参考文献】

- 池尻伸吾 2003「愛媛県越智郡岩城村津波島採集の石器」『紀要愛媛』第3号、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岩城村誌編集委員会編1986a『岩城村誌』上巻 古代・中近世編、岩城村
- 岩城村誌編集委員会編1986b『岩城村誌』下巻 現代編、岩城村
- 岩城村郷土誌編集委員会編1970『伊予岩城島の歴史』（上巻）岩城村教育委員会
- 愛媛県教育委員会文化振興局編1987『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』愛媛県教育委員会
- 谷若倫郎 1991「岩城村」『愛媛県内古墳－分布調査報告書－』愛媛県教育委員会芸術・文化財室編、愛媛県教育委員会
- 日本の地質「四国地方」編集委員会編1991『四国地方』（日本の地質8）、共立出版株式会社
- 野口光比古 1992『赤穂根島埋蔵文化財試掘調査報告書』岩城村教育委員会
- 山本貴仁・小川次郎・宮脇 馨 2007「愛媛県越智郡上島町赤穂根島総合生物調査」『愛媛県総合科学博物館研究報告』No. 12、愛媛県総合科学博物館

圖 版



1. 小漕遺跡近景（南西から）



2. 小漕遺跡出土縄文土器



1. 小漕遺跡出土縄文土器底部



2. 小漕遺跡出土製塩土器・須恵器



3. 小漕遺跡出土石器



1. 長江遺跡近景（南東から）



2. 長江遺跡出土縄文土器



1. 長江遺跡出土古式土師器・製塩土器



2. 長江遺跡出土石器



1. 船越遺跡近景（南西から）



2. 船越遺跡出土縄文土器



1. 船越遺跡出土縄文土器底部



2. 船越遺跡出土製塩土器・土師器・須恵器



3. 船越遺跡出土石鏃



1. 空久保遺跡近景（南東から）



2. 空久保遺跡出土弥生土器
・紡錘車



3. 空久保遺跡出土石鏃



1. 積善山遺跡遠景（遺跡は積善山山頂部、南から）



2. 積善山遺跡近景（西から）



3. 積善山遺跡出土弥生土器



1. 赤石遺跡近景（東から）



2. 赤石遺跡出土製塩土器・古式土師器



1. 石風呂海岸遺跡近景（南西から）



2. 石風呂海岸遺跡出土縄文土器・弥生土器



1. 石風呂海岸遺跡出土製塩土器 (1)



2. 石風呂海岸遺跡出土製塩土器 (2)



1. 石風呂海岸遺跡出土製塩土器脚台部



2. 石風呂海岸遺跡出土古式土師器・須恵器



3. 石風呂海岸遺跡出土須恵器・土師器・土師質土器・須恵質土器・瓦器・石錐



1. 重山宮裏遺跡遠景（東から）



2. 重山宮裏遺跡出土弥生土器



3. 重山宮裏遺跡出土土師質土器（1）



1. 重山宮裏遺跡出土土師質土器 (2)



2. 重山宮裏遺跡出土土師質土器 (3)



1. 重山宮裏遺跡出土土師質土器・瓦器



2. 重山宮裏遺跡出土土器



1. 土居ノ内遺跡近景（北西から）



2. 土居ノ内遺跡出土瓦質土器・瓦器・青磁・土師質土器



1. 小村遺跡近景（南西から）



2. 小村遺跡出土弥生土器・須恵器・須恵質土器・白磁・瓦器



1. 高原遺跡近景（北から）



2. 高原遺跡出土弥生土器・須恵器・瓦器・青磁・土師質土器



3. 高原遺跡出土石器



1. 海からみた丸串古墳（南西から）



2. 丸串古墳（2008年4月29日撮影）



1. 丸串古墳（2015 年春、南から）



2. 丸串古墳（2015 年春、南西から）



3. 測量調査（2015 年春）



4. 集合写真（2015 年春）



5. 蓋石検出状況 1（南から）



6. 蓋石検出状況 2（西から）



7. 蓋石取り外し後の状況 1（南から）



8. 蓋石取り外し後の状況 2（南西から）



1. 長側石・短側石の検出状況（南から）



2. 長軸方向土層断面（南から）



3. 短軸方向土層断面（西から）



4. 人骨検出状況 1（南から）



5. 人骨検出状況 2（南西から）



6. 蓋石の復元（北から）



7. 石棺の保護（南から）



8. 集合写真（2015 年夏）



1. 頭蓋骨（南から）



2. 出土した歯



3. 出土した製塩土器

報告書抄録

ふりがな	かみじまちょうないいせきしょうさいぶんぷちょうさほうこくしょ							
書名	上島町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ							
副書名	平成25～27年度上島町内遺跡発掘調査等事業報告書							
巻次								
シリーズ名	上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	5							
編著者名	(编者)有馬啓介(著者)有馬、笹田朋孝、清水伸、パリーノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	上島町教育委員会							
所在地	〒794-2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地 TEL 0897-77-2128							
発行年月日	2018年３月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いせき　しょうさいぶんぷ 遺跡詳細分布 ちょうさ 調査	かみじまちょうない 上島町内	38356	—	—	—	20131021 ～20160331	—	保存目的の 分布調査
まるぐし　こぶん 丸串古墳	えひめけん　おちぐん 愛媛県越智郡 かみじまちょう 上島町 いわぎ 岩城	38356	—	34°　14′　01″	133°　9′　10″	20150327 ～20150331	300㎡	保存目的の 発掘調査
						20150801 ～20150810	20㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
丸串古墳	古墳	古墳時代		箱式石棺１	頭蓋骨、歯、製塩土器		花崗岩製の箱式石棺墓 内から人骨が出土	
要約	丸串古墳の箱式石棺は、発掘調査の結果から、短側石は１枚で小口とし、長側石は２枚を平接ぎして長側辺とし、それらがロの字をなすように設置され、その上に５枚の蓋石が載せられていたと推測される。石棺の内側の大きさは長軸165～170cm×短軸40cmに復元される。礫を敷いた上に粘土を貼って構築された棺内の床面、ロの字に規則正しく配置された長側石と短側石、そしてその上に載せられた蓋石などから、古墳時代の遺物がほとんど出土していないものの、古墳時代の箱式石棺の可能性が高い。							

上島町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ
－平成25～27年度上島町内遺跡発掘調査等事業報告書－

（上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告第5集）

平成30（2018）年3月31日発行

編集・発行 愛媛県越智郡上島町教育委員会
〒794-2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地

印刷 岡田印刷株式会社
〒790-0012 愛媛県松山市湊町7丁目1番地8
